ＩＳ～人は過ちを繰り返す～

ロシアよ永遠に

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２０ＸＸ年

篠ノ乃束の生み出した宇宙進出を目的としたマルチフォームスーツ、ＩＳ『インフィニットストラトス』が世の兵器に幅を利かせる女尊男卑の世界。

その世界に家族を奪われた一人の父親。

１０年以上前に開発され、しかしＩＳにその存在を奪われた古きパワードスーツと、一つのガントレット型携帯ＰＣ。

篠ノ乃束の想いと反して、兵器として蔓延るこの世界に、彼は反抗する。

そして…

ＩＳ学園に、元世界最強のＩＳ乗りの弟と同じくして、もう一人の男性操縦者が入学する。

彼はとある理由から、数年間日の光を浴びることない場所で過ごしてきた。だが、一夏のＩＳ起動事件で転機を迎えた。済し崩しではあるが、外の世界へとやって来た彼は、ＩＳ学園で何を学び、何を起こすのか…

目次

第1話『この壊れかけの世界で』 1
第2話『束一味との邂逅』 25
第3話『IS学園』 39
第4話『絡まれたアイツ、絡んできたアイツ』 52
第5話『デカいアイツ、眼鏡のあの子』 69
第6話『始まるクラス代表決定戦』 84
第7話『蒼き雫VSバケツ頭』 106
第8話『次の戦いに向けて』 120

第1話『この壊れかけの世界で』

希代の天才にして天災『篠ノ乃束』が宇宙進出を目的として開発したマルチフォームスーツである。１０年前、世界各国のミサイルが日本へと発射された。それを白いＩＳ（インフィニット・ストラトス）が全て撃破という、とんでもない事件。そして、ミサイルを撃墜したそれを拿捕すべく出撃した自衛隊をもことごとくあしらってみせる。後に白騎士事件と呼ばれるこの一件と、露呈したその白騎士の高すぎる性能は、既存の兵器を凌駕し、皮肉なことにそれらは開発者の本意と裏腹に兵器としての進化を続けていた。

だが、そんな兵器にも欠点はある。

女性にしか動かせない、と言うところだ。

兵器のトップとして世間に知られるＩＳ。それを動かせるのが女性のみともなれば、一部の女性が掲げ始めた女尊男卑の風潮。それは瞬く間にＩＳの性能と同じくして広がり、世界の歪みと化していた。

「…また男性が逮捕された、か。」

アメリカのとある荒野。その一角にポツリと存在する街『サンクチュアリ・ヒルズ』。

決して大きな街ではない、しかし彼にとっては我が家の存在する場所。今にも崩れそうな家屋の中で、ニュースペーパーに視線を走らせていた。

目に留まった記事。ここより南にあるボストンの街にあるウルトラスーパーマーケットで女性に痴漢を働いたと言う物だ。

端から見れば逮捕された男には同情の余地はないものだろう。しかし、今の世界の風潮を鑑みるならば、真偽は書面通りかと言えばそうとは言いきれない。女尊男卑の立場。その風潮に感化された女性、彼女がそれを利用した冤罪である可能性もあるのだ。そうだとも言い切れないが、そうでないとも言い切れないのもまた事実だった。

『旦那様。』

男性の声を模したマシンボイスが廃屋に響いた。白く、しかし所々錆びれている機械が浮遊していた。三つのカメラアイと、それと同数のマシンアーム。ごうごうとスラスターを噴かせてホバリングしている。

『そろそろお仕事の時間です。』

「ん?もうそんな時間か。」

男性は、ニュースペーパーをたたんで、カウンターテーブルの上におくと、機械―コズワース―が淹れてくれたコーヒーを口に運ぶ。程良く冷めていたため、難なくぐいっと飲み干す。

「ん？いつもと少し風味が違うな。」
『中々珍しい豆が手に入りまして、少々ブレンドにアレンジを加えてみました。お気に召したのでしたら、配合比率を登録しておきますが？』
「頼むよ。これは中々寝起きに嬉しい味わいだ。」
『畏まりました。』
　空になったコップをコズワースが下げるのを横目に、男性は家に並び立つ車庫へと足を運ぶ。家の屋根と一体化しただけのシンプルな車庫だ。そこに駐車されたトラック。何処にでもある、有り触れたものだが、その荷台にぼろぼろのカバーを掛けてあるのが一際目を惹く。余程大きいのか、カバーがテントのようにピンと張っている。
「じゃ、行こうか。」
　誰に言うともなく、その荷台にあるカバーをぽんぽんと叩くと、運転席にゆったりと乗り込む。キーを回すと、エンジンが掛かる。しかし、内部が劣化しているのか、エンジンのタービン音がカタカタと煩い。
「やれやれ。そろそろ買い換え時かな？」
　独りごちながら、マイホームの車庫よりフュージョン・コアによって稼働する小型原子炉搭載のトラックを発進させる。
「それじゃ、今日もお仕事といこうか。」

サイドのガラス越しに映すのは凄惨な戦闘跡を物語る瓦礫の山、山、山だ。彼にとって見慣れた風景ではある。だが、見慣れたとは言えども、そこから何も感じないわけではない。

「ＩＳ…！」

先のように、あらゆる現行兵器を凌駕するそれの名を、忌々しげに口にした。

妻子を奪った憎き兵器。

開発者の意図とは別に、兵器として世界に知れ渡り、その特性から生み出される女尊男卑の世界の風潮。

あぁ、そうだった。

かつて核という、膨大なエネルギーを生み出す技術を得た人類は、その莫大さを利用して爆弾と化した。開発者の意図は分からない。しかし、兵器を目的として生み出したのでは無いと思いたい物だ。もしそうならば、核とＩＳはよく似ているものだ。開発者の意図とは裏腹に、兵器としての利便性に目を付け、その力を振るう。

そう。

人というのは、圧倒的且つ高性能で利便性に優れたものを兵器に転用する事が得意なようだ。それが人の性なのか、あるいは…。

そんな人類に呆れたからか、篠ノ乃博士は行方をくらましたのかも知れない。

「全く…、人は過ちを繰り返す、か…。」

このサンクチュアリ・ヒルズは、女尊男卑に煽られることもなく、平和に暮らしていた。そのはずだった。だが、女性主義者共のＩＳにより、街は焼き払われ、妻は殺され、息子は攫われた。

なぜ息子が攫われたかは判らない。だが、あの女性主義者共の口にした言葉は今でも脳裏と耳に焼き付いたままだ。

『今の世は、女が至上で、男は家畜なんだよ!!それを理解しない奴らは世界に必要ない!!』

そう言って、老若男女問わず、その圧倒的な火力で街を焼き払った。逃げ惑う人には、大口径のアサルトライフルで笑いながら蜂の巣にし、命をこう人には、敢えて殺さず、手と足を順に一本ずつ吹き飛ばし、ジワリジワリと苦しませながら死に追いやった。

そう…世界に染まらないから、という大義名分も甚だしいものでもなく、奴らは『遊んでいた』のだ。

結果として…自身は瓦礫に埋もれていたので、ハイパーセンサーと呼ばれる超高性能のセンサーを以てして、奴らは助からないと判断したのだろう。そのまま撤収していった。確かに生身では動かせないほどの瓦礫に埋もれていたが、コズワースが撤去してくれたお陰で、彼は一命を取り留めた。コズワースの存在は、奴らにとっては予想外だっ

たのだろう。

…そして、なくなった街の人々を弔った後、彼は一つの決断をする。

数㎞走ったボストンの郊外にトラックを停めた。先のＩＳの襲撃による物なのだろう。寂れ果てた、と言うならは、まだ被害の少なさが物語れるだろう。未だ建物は原形は留めているし、壊れているのもショーウィンドゥくらいな物だからだ。

男は、普通に考えれば近寄りがたいその店舗のドアを躊躇いなく開け放つ。一週間に一度は、『今回の仕事で使用する物』の整備のために訪れる。しかし、彼の出入り以外はないからか、開け放たれた際の空気の循環によって、健康にヨロシクなさそうなハウスダストが舞い散る。毎度のことではあるし、予めマスクとゴーグルを着用していたために、特に支障は無い。そして掃除をする気も無い。と、言うのも、『目的はこの場所ではない』からだ。

「んっ…!!」

奥にある、恐らくは使用していたときは、バーの雰囲気を盛り上げていたのであろう

ジュークボックスを、一息と共に壁と並行にスライドさせる。若干重々しいそれを動かすのには、普通の人では数人掛かるであろう物ではあるが、生憎と彼は従軍経験があるし、普段からトレーニングを欠かさないのもあってか、余り苦も無く動かせた。

ジュークボックス一台分横に動かすと、その下から現れたのは薄暗い地下へと続く階段だった。

廃墟の中に隠し通路。

元々、このバーは武器の密輸に使用されていたらしく、当然マスターがここを離れる際に銃火器を持ち出していたが、この意外性のあるようでベタな隠し通路は、自身の倉庫として活用するには有り難い物だった。

左手に付けられた小型端末から、懐中電灯さながらの光が発せられる。この端末は、とある企業が開発したＰＩＰ－ＢＯＹと呼ばれる携帯端末で、所有者の神経に繋げることにより、バイタルや周辺情報、更には忌々しいＩＳの武器格納の技術である量子化を可能とし、携帯物品を制限内ならば重量を感じさせることなく持ち運べる優れものだ。だが、生産数は極々僅かで、軍役時代の知人のツテで譲り受けたにすぎない。なんでも、その企業が試作品を数台生み出した地点で、女性主義者共の団体による圧力で会社は倒産。理由は、ＰＩＰ－ＢＯＹの性能を危険視し、発展と量産をされる前に芽を摘んだ、と言う物だというのがまことしやかに囁かれていたが、真実か否かは判らない。だが、有

り得ない話でもないだろうが…。

確かに、空を縦横無尽に駆けるＩＳにも搭載されている量子格納技術を搭載された携帯端末が存在すれば、携行火器を多量に持ち歩ける。つまり、一歩兵がロケットランチャーやガトリング、ライフルなど、あらゆる戦場や状況に対応する様になる。無論、補給も出来るし、戦場においてこれだけのアドバンテージを持たせられるのは大きい。それだけに、ＩＳを自分達の力の象徴と思っているヤツ（女性主義者共）らは、ＩＳに対抗できる可能性が無きにしもあらずともあるＰＩＰ－ＢＯＹを断つのは、ある意味至極当然かも知れない。

閑話休題

まぁそんなこんなで、稀少なＰＩＰ－ＢＯＹを得た彼は、下ってきた階段が終わりを迎え、一戸建てのリビングほどの広さの一室に辿り着いた。壁に備え付けられたスイッチを見つけると、迷うことなくオンにする。すると、蛍光灯の淡い光が一室を照らし出す。暗い階段を下りてきたので、若干眩しさに目が眩むが、徐々に目が慣れてくれば、見慣れた部屋が目に入る。そこは、上の部屋とは違った意味で散々としていた。床や、壁に備え付けられた棚には、スパナやレンチなど工具が散らばり、使用されて余った金属の端材をそこらかしこに広げられていた。

「…この仕事が終わったら、少し整理しようか。」

技術の発展、と言うのは何も良いことばかりでは無い。コズワースという、家事手伝いロボットが一部普及してしまったばかりに、人間その物が掃除する、と言うことに対して億劫になってしまったのだ。

自分達がせずとも、ロボットがやってくれる。

そんな固定概念が出来てしまったのだろう。

女尊男卑主義者共の主張もそうだが、これもこれで問題だ。

自身の生活能力の無さに呆れてか、頭を掻きながらも、奥に鎮座するそれに近付いていく。

「さぁ、そろそろ仕事だ。」

二メートルほどの人型が、黄色いフレームのクラフトのステーションに吊されて佇んでいる。それに語りかけるようにポンと、その冷たく堅牢な装甲に触れる。だからといえど答えるわけではない。しかしこれからの仕事で共に行く相棒なのだ。別に損はない。ソイツの背後に回ると、その傍らで稼働していたマシンから、空き缶サイズのフュージョンコア。それを抜き取る。人型の動力のような物だ。充電すべき物が無くなったマシンは、安全のためにその稼働を停止させる。そしてそれを、人型の背中、それに付けられたハンドルのような物の真ん中にぶち込む。…よし、これで稼働準備できた。

「行くとしよう。」
フュージョンコアを中心にした、バルブハンドルのようなそれをしっかりと握り、力強く、ほんの少し回転させる。
すると、背やヘルメット部はせり上がり、腕部と脚部、それぞれその装甲が開け放たれ、男を受け入れるように中を露出させた。
最早慣れたものだ。躊躇いもなくそれに乗り込むと、減圧の音と共に装甲が閉じられ、まさしく彼は人型のそれと一体化する。
視界には、フュージョンコアの残りエネルギー、各部装甲の損傷具合、ＡＰというオ特殊機動の為の瞬間エネルギー、デジタルコンパスなど、戦闘に必要な情報の羅列がずらりと並ぶ。
「各部位問題なし。うん、ボディの新装備も、実に馴染んでいるな。」
何せ今回は全世界の最強兵器を銘打っているのだ。これぐらいのものを装着しなければ、ある程度覆すことは出来ないだろう。
何せ纏っているのは、旧世代…と言っても、ＩＳが現れるまでの歩兵の地力、それを一気に押し上げていた『パワーアーマー』なのだから。

風潮というものは、かくもウイルスの如く迅速且つ広範囲に蔓延する。
各国に程度の差はあれど、その女尊男卑と言うものはどの国にもあり、街その物が染まらないなどというのはサンクチュアリヒルズなど、国に指折り数えるほど有るかどうかも怪しい。それ故に、世界に染まらない者ども、と言う名目で女性主義者共に淘汰され、村や町はその姿を物言わぬ屍と瓦礫へと姿を変えさせられる。
もはや、大義名分を持っているなどと勘違いした連中の大規模なテロであり、虐殺と破壊だ。
それ故に、その女性主義者共の襲撃から逃れた奴らや、冤罪を掛けられ命からがら逃げてきた男、女尊男卑の世界に愛する者を殺された女達がこぞって集い、レジスタンスを組織して、ゲリラ戦を仕掛けていると言うのは日常茶飯事だった。
「ＧＯ！ＧＯ!!ＧＯ!!!」
廃れた服に、気休め程度の防弾装備で、男達は前方にあるキャンプを目指す。
ボストンから数十㎞離れた所にある荒野で、反女尊男卑の中隊がアメリカ軍のＩＳ、

そのテストを兼ねての軍事演習を狙って襲撃してきたのだ。市街地に程近い場所での軍事演習と言う理由については、やはり民衆の目の前でＩＳを披露し、改めてＩＳ及び女性の確固たる力を見せしめ、女には自信を、男には惨めさを自覚させる、と言うのが上層部の女性士官の考えだそうだ。

だが、迫撃砲の援護の中、敵歩兵を蹴散らし、キャンプへ雪崩れ込まんとする。

テストＩＳとは言え、その1機だけでも出て来れば、かなりの損失を受けるだろう。下手をすれば殲滅させられる。しかもテスト機ともなれば護衛のＩＳも数機いるだろう。それだけに迅速且つ確実に制圧してＩＳを破壊し、あわよくば奪取する。それが今回の任務だ。

元々、それほどレジスタンスには資金がない。各々の持ち寄りと、軍の補給車両を襲って入手した武器のみ。それ故に一種の賭のようなものだ。これが成功すれば、各国にいるレジスタンスを鼓舞できるし、何よりもＩＳに勝利したという最高のアドバンテージと自信を得られる。

普通ならばテスト機が奪われた時用に自壊装置を組み込むものだろうが、ＩＳの性能に絶対の自信を持つ連中にはそんなものをつけるなど杞憂だろう、と言うのが皆の意見だった。

「女性兵!!俺達が突破口を開く!!何としてもＩＳを奪え!!」

「「はい!!」」
「安心しろ！俺達が守って…がぁっ!?」
「マリオーっ!?」
「畜生!!テメェらよくも!!うぉぉぉっ!!!」
もはや特攻染みた作戦。しかし、これは女尊男卑への反攻の狼煙だ。男だから、女だから、そんな腐った固定概念を盾に権力を振り回す奴等への復讐。
「これが…俺達の…貴様らに淘汰された者達の…!!!」
『淘汰されたなら、犬みたいに大人しく私達女性の下に傅いていれば良い物を…』
『これだから男は低脳なのよね！』
レジスタンスに戦慄が走った。
機械を通して出ている声。
拡声器ではない、もっと澄み渡ったもの。
そして…
聞きたくない飛翔音。
一対の翼を広げたかのように、ネイビーブルーのそれは、戦場の空へ舞い降りた。
『全く、こんな雑魚共を片付けられないなんて、男は肉の壁にもならないのね。』
『まぁ？私達と違って、幾らでも替えが効くからねぇ。』

『それでもまぁ、たいした装備もなくここを責めてくるその蛮勇に免じて、ＩＳで駆逐してやるから、光栄に思いなさい？』

ＩＳ…

テスト機の護衛に着いていた奴らが動き出した。

ネイビーブルーに染められたＩＳ…ラファール・リヴァイヴ、それが３機。

その内の１機が、対歩兵用ＩＳ武装である２００ｍｍバズーカ『ジャスティス』を展開し、レジスタンスの最前線へと構える。だが…

「お、おい貴様ら！その位置だと、私達まで巻き込まれ…」

『うっさい。敵と一緒に死ねるなら本望でしょ？これがジャパニーズ・バンザイ・アタック？』

『それ、何かちがくない？』

『まぁ、男なんていくら死んでも大して気にならないし？』

『キャハハハ!!』

「キ、貴様ら…!!」

最早遊び感覚だ。笑いながら、遊びながら、まるで子供が無邪気に蟻塚を壊すように。味方をも巻き込んで敵を殺す。そんな奴等を護るために…！アメリカ軍の護衛の男性兵は、その目に憤怒の炎を滾らせる。

『何？その目…文句有るの？』
『じゃあ？これであんたも殺す名分が出来たね？どう報告しようか？』
『アイツがレジスタンスと？がっていた…とかで良いんじゃない？』
『それ採用!!』
『…まぁそんなわけだから？肉片になりなさいな。』
ラファールの指が、バズーカの引き金に掛かる。
その口許は、ここから遠く、見えなくても解る。
嗤っている…！
もはや奴らに人間としての感情を求めるなど絶望的だ。女という立場に染まりきった、ＩＳの力に酔ったただの傀儡。
『バーイ♪』
別れの言葉を継げ、引き金を引かんとした時だった。
『…っ!?ロックオンマーカー？』
ハイパーセンサーが探知したのは赤外線によるロックオン。
バシュウ!!と噴射音と共に、バズーカを構えるＩＳ操者に、一発のミサイル弾が差し迫る。
慌てて上昇しようと、ＩＳに思考を送るが、時は既に遅く、直撃し爆発。

『キャアアアッ!?』

シールドバリアが発動し、爆発による振動で機体が大きく揺れる。慌てて体勢を立て直そうとするが、

バシュウ!!

バシュウ!!

バシュウ!!

続けざまに3発。

ロケット噴射しながら緩い弧を描き、迫る。

『嘘…!?嘘嘘嘘ぉぉぉぉっ!?』

シールドバリアがエネルギー枯渇によって絶対防御まで発生し、四肢が、非固定のウイングが、胸部装甲が爆ぜる。絶対防御によって、最低限搭乗者の命『を』守るという、その文字通りに、女性の頭と胴、そしてコアが収められている中枢だけを残し、赤い雨と、肉の焼け焦げる匂いを周囲にまき散らしながら墜落した。

『なっ…!!』

『マリアが…!?マリア―!!』

『畜生!!一体誰が…!!』

ハイパーセンサーが捉える。

その姿を。
フルスキン（全身装甲）の、近代的な鎧を纏ったそれは、一昔前のＳＦ映画にでも出て来そうなもの。
黒いカメラアイのようなゴーグルや、身体の各所に露出したパイプ。
ＩＳのようなスマートな物ではなく、鈍重で、いかにも遅そうな外見だ。
『データ照合……!?１０年以上前の軍で使用されていたＴ－５１パワーアーマー？』
「間に合ってくれたか…傭兵。」
『済まない、遅くなった。』
パワーアーマーからの通信は、ＩＳほど高度な物ではない。さすがにかなり古い物なので、その声はくぐもってはいる物だが、それでも十分通信には支障はない。
「いや、構わんよ。今の所…被害は少ない方だ。」
『骨董品風情（アンティーク）がＩＳを…マリアを…!!アイツが…アイツがぁぁぁ!!』
憎しみを込めて激昂する。最早その顔は憎しみで変容し、内面と同じく醜く歪んでいる。
無論、最強の現行兵器と謳われるＩＳ、それと共に同僚を墜とされたことで、彼女は何も見えていない。
『死ねぇぇぇぇ!!!!』
『それはこちらの台詞だ。…もっとも、情報を聞き出したあとに、だが。』

『あぁぁぁぁっ!!!』

最早獣の雄叫び。咆哮を周囲にオープンチャンネルでばらまきながら、アサルトライフルを構える。その口径は、歩兵が扱う物よりも一回り大きく、生身の人間に撃ち込めば、為す術も無く肉塊となって散るだろう。

だが…

ガシャリ…

と、重厚そうな音と共に、先程一人撃墜した四連装赤外線追尾式ミサイルランチャーを破棄し、それをＰＩＰ－ＢＯＹから実体化させる。

長いバレルが６本。パワーアーマーのアシストを以てしてもそれは重く、生身で持ち運ぶには相応の筋力が要る。しかし、その威力、連射性能共に折り紙付きだ。

レーザーガトリング

パワーアーマーの動力源であるフュージョンコアを用いることで、レーザーガンを雨のように撃ち込むことが出来る。しかし、今回フュージョンコアは一つだけしか持ち運べず、ガトリングの本体からケーブルでパワーアーマーのフュージョンコアへと接続し、エネルギー供給を行っている。稼働時間は少なくなるが致し方ない。

『さっきみたいな不意打ちならいざ知らず…生身の狙いで…ＩＳに当てられるかよ！』

『…Ｖ．Ａ．Ｔ．Ｓ．発動』

瞬間、パワーアーマーの男、その感覚が鋭利に、そして研ぎ澄まされる。音速を超えた機動力を誇るＩＳ。その動きが、いや、世界が緩慢に動いている。

ＰＩＰ－ＢＯＹに搭載されたターゲット補助機能『Ｖｏｌｔ－ｔｅｃ　Ａｓｓｉｓｔｅｄ　Ｔａｒｇｅｔｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ』。

神経接続を行っているのは、それを通して視覚、聴覚など、あらゆる感覚と情報を脳とＰＩＰ－ＢＯＹで処理し、一時的に超人的な情報処理能力を得られる。世界が緩慢に感じるのは、その福次効果に過ぎない。敵との距離、手持ちの武器、自身と相手のバイタリティーデータ、気候、その他もろもろのデータを加味して、敵のＩＳに命中率が表示される。

《…７５％…ＩＳ相手に上々、かな。》

そして引き絞られるトリガーと共に、高熱のレーザーガトリングが、２機のＩＳ。その装甲を焼きこがし、操者の伸びきった鼻は、その翼と共に折れ、地に墜ちることとなった。

『結局、ショーンの情報はない、か。』

ガション、ガションと、パワーアーマーで歩行しながら、彼は自身の秘密基地へと帰還する。正直、フュージョンコアの残りエネルギーが乏しく、いざという時に残しておく為に、省エネでこうして徒歩で帰っているのだ。

あれからレジスタンスと演習場を制圧した。ＩＳが墜とされた、と言うこともあるが、先程の自身らを巻き込むのも辞さない操者の姿勢に、歩兵や士官は愛想を尽かして投降したため、あっさりと制圧できた。そして、撃墜した女性操者から、女性主義者に誘拐された息子のショーンの情報を聞き出そうと尋問した。しかし、

『私は知らないいい!!何も知らないのぉお!!だからお願い助けてええぇぇ!!』

などと、戦闘時の強気な姿勢は何処へやら、及び腰となっていた。最も、四肢を破壊しているので腰を及ばすことは出来ないが。

彼には、奴等が嘘をついていると言う疑いは持たなかった。不利な状況に立たされてあそこまで取り乱して命乞いをするなどと、完全な女性主義者の連中と違って、女尊男卑の風潮に乗って上っ面で強気に出ていただけなのだろう。完全な女性主義者ならば、男の軍門に降ったり、男に負けたなどという事を認めずに自害したりするだろう。

『だが、レジスタンスはＩＳを入手できた。となればこれからの戦い、優位性を以て臨める。…それに便乗していけば、ショーンの情報も…』

今後の方針を固めよう、そう考えたときだ。

『未確認飛行物体…接近!?』

ＰＩＰ－ＢＯＹから、敵性とは判らないが、高速接近してくる機影を捉えたのだ。

『あれか…!』

見上げれば、高速で…目測でしかないが、人よりも巨大な何かが自身を目掛けて落下してきている。

…もしやミサイルか？

ＩＳを撃退した自身の始末をするために、ミサイルを？

直撃すれば、いくらパワーアーマーを纏っているとは言え、ただでは済まないだろう。

となれば、対処は一つ。

『Ｖ．Ａ．Ｔ．Ｓ．』

再び神経を研ぎ澄ませ、自身に迫るそれに、レーザーガトリングの雨を降らせた。上空に向かって撃つから、降らせたと言うのは不適切かも知れないが、当たれば蜂の巣であろうそれは、落下してくるそれにいとも容易く数多の風穴を開け、爆散させた。

フュージョンコアのエネルギーを残しておいて正解だったと、自身の判断を自画自賛

する。
しかし…
爆散し、朦々と発した爆煙から、何かが飛びだしてくる。
ＩＳ…？
にしては小さい…？
よく見れば高速で回転している？
そしてそれは降下…と言うよりも、落下し、
「はいっ!!１０点１０点１０点１０点１０点!!おぉっと!束選手満点だよ～!!」
見事なまでに体操選手の如くＹの字に着地した。
その際、落下の衝撃と風圧で、彼女の奇抜なエプロンドレス、そのスカートがフワリと舞い上がり、真っ白な下着が見えたのは黙っておこう。
『キミは？』
「私？私は篠ノ乃束だよ～？ぶいぶい!!」
なんというか…奇抜なファッションだ。
先述のエプロンドレスもそうだが、ヘアバンド代わりにつけられている…機械のウサ耳が何とも言えない。彼女の幼げな顔付きと相俟って似合ってない、とは言えないのだが…。

「ほうほう…キミだね？旧式のパワーアーマーで、ＩＳを３機も撃ち落としたのは…へぇ～？ほうほう…？」

まるで嘗め回すかのように自身の…いや、パワーアーマーを見てるこの少女？女性？に対して、嫌な汗が背を伝う。あれだけの高高度からの着地をしても怪我一つない様子で、一体何者なのかという……ん？篠ノ乃束？タバネ＝シノノノ？

『まさか君が…ＩＳを開発したって言う…？』

「お、ようやく気付いた？もう少し早く気付くと思ったけどなぁ、束さんも地に墜ちたのかなぁ？」

『そ、それは済まない。』

「嘘だよん！まぁそれはそれとして…」

にこやかにしていた彼女の垂れ目、それが真剣な物へと変わるのが目ではなく、肌が先に感じた。彼女の纏う…気配、それその物が別の物へと変わったからだ。

「キミ、こんな腐りきった世界、壊す気ある？」

彼女のその言葉がその時彼は理解できなかった。

しかし今思えば、それは彼女の願いだったのだろう。

篠ノ乃　束。

ＩＳ開発者である彼女と、後に世界の破壊者の一翼と呼ばれる彼のファーストコンタ

クトだった。

第２話『束一味との邂逅』

　人は過ぎた科学を見れば、あたかもそれを魔法と錯覚する、とは言うが、まさしくその通りだと思った。行き成り空からミサイル（彼女曰く、ステルスニンジン型ロケットらしい）と共に降りてきた、天災こと篠ノ乃束に言うがままに案内され、気付けば彼女の秘密基地らしき場所に彼は立っていた。

「な、何を言っているかわからないと思うが、僕も何をされたのかわからなかった…

　頭がどうにかなりそうだった…

　超スピードだとか、催眠術だとか、そんなチャチな物じゃあ断じてない。

　もっと恐ろしいものの片鱗を味わったよ…」

「ほらほら、早く着いて来なよ。折角束さんのラボに来たんだから。光栄に思って良いんだよ？有象無象のハズの君が、ここに足を踏み入れること自体奇跡なんだからさ。」

　この篠ノ乃束、実を言うとコミュ障とか何とかを通り越して、自分の認めた人間以外を認識できないという、とても偏屈な人間である。一部の自身の友人どころか両親をも認識せず、認識すると言えば、友人たる織斑千冬とその弟の一夏、自身の妹たる箒、そして…

「お帰りなさいませ束様。」
「くーちゃぁぁぁん!!ただいまー!!!」
迎えに出て来たであろう、銀髪の少女を見掛けるや否や、瞬間移動もかくやと言わんばかりの速さで抱き付き、頬擦りし始めた。
クロエ・クロニクル
束が認識できると思われる最後の一人だ。一応、形式上は母娘という関係らしい。何故か目を閉じ、杖を突いている点を見るに、盲目なのだろうか？
「…束様。少々焦げ臭いのですが…。」
「あ～、もしかしたら撃墜されたときに、服がちょぉっと焦げちゃったかな？いやぁ、束さんとしたことが、失敗失敗～。テヘペロ♪」
「撃墜…!?もしや…そこにいる男が…？」
母たる束に危害を加えた男ともなれば、このクロエ・クロニクル。百万回生まれ変わっても恨み晴らすだろう、復讐系女子。向けられる敵意が痛々しい
『旦那様、事実とは言え、ある程度釈明をしないと、そこのお嬢様に噛み付かれますよ。』
「あ～、その、ミサイルと勘違いしてね。申し訳ないと言うか…。」
「な…よりにもよって…束様をミサイルと…!?」
カッと見開かれた目。その異質さに、彼は少々戸惑う。

白であるはずの部分が黒く、虹彩が金と言う、文字通り異色。それを目にして、彼は一瞬戸惑い、そんな彼を見たクロエは、ハッとなって目を閉じる。
「君は…」
「はぁいＳＴＯＰ！女の子のプライベートに踏み込もうとするなんて、男としてどうかと思うＺＯ☆」
『全くです。奥様が生きておられたら、異議ありが飛んできていたことでしょう。』
束の反感を買った
コズワースの反感を買った
「…所で今更だけど、そのヘンテコな機械は何なの？家に一度戻ったときに連れて来たけど。」
『ヘンテコとは心外な！私はＭｒ．ハンディシリーズにして、旦那様に名付けられたコズワースというれっきとした名前があるのです。何処の馬の骨とも知らない駄兎には判らないでしょうが。』
「あっははは～、私の聞き間違いかなぁ？いま束さんをして駄兎なんて言う、戯れ言や寝言とも取れるような言葉が聞こえたんだけどぉ？」
『おや？聞こえませんでしたか？駄ラビット。兎の割に耳が遠いのですね。もしかして、もうヨボヨボなのですか？その姿は若作りのものだと？ふむ、データで貴女は２

（ピー）歳だとか言われていますが、余程さば読んでいると見受けられますね？』

ブチィ!!

そんな聞こえてはならない音が周囲に響いた。

「クヒ…クヒヒヒ…！ねぇ……有象無象の君。このガラクタを文字通りガラクタにしても良い？良いよね？返事は聞いてない。」

『旦那様、本日のディナーは、クソ兎のソテーなど如何でしょう？肉の品質は保証しかねますが。』

最早一触即発。

今まさに血とオイルに塗れる決闘の火蓋が切って落とされようとしており、傍らで見ていたクロエもオドオドしている。

片やアームから火炎をいつでも吐けるように。

片や両手の指の関節にスパナやドライバーを挟んで、某奥州筆頭の六爪竜のように。

３つのセンサーアイと一対の眼が火花を散らす。

「落ち着くんだ。」

そんな一人と一機に、束にはライフルから発射した注射器を、コズワースにはメンテナンスパネルにＰＩＰ－ＢＯＹから伸ばしたプラグを、それぞれ挿刺す。

するとどうしたことか。

　先程の険悪な雰囲気は何処へやら…。
「セカイヘイワノタメニ、ガンバルデス。」
『ニクシミヲウムモノ、ニクシミヲソダテルおいるヲハキダシマス。』
「やれやれ、これで暫くは何とかなるか。」
「束様…!?」
「ドウシタデスカ?くろえサン。」
「っ!?」
　何と言うことでしょう!あの世界屈指のマイペース屋な束が、自身をさん付けしています!普段のハイテンション振りが見事に抑えられ、淑女と見ても問題ないまでに変貌を遂げました!イギリス代表候補生も真っ青です。
　対し、コズワースにおいては、血をオイルと言い換えるあたり、男のハッキングして書き換えた内容に匠の技とユニークさが光ります。
「束様が…束様が…」
「あの場で血みどろオイルみどろな戦いは勘弁して欲しかったからね。まぁ、三十分もすれば元に戻るさ。とりあえず、ゆっくり話せるところへ案内してくれないか?クロニクルさん。」
「…クロエで構いません…えっと……」

「あぁ、そうだね。名前を言ってなかったか。僕はネイト。こっちは僕の家で家事を手伝ってくれていたＭｒ．ハンディタイプのコズワース。よろしく頼むよ、クロエさん。」

「はっ!?束さんは一体…？確か…有象無象のあんちくしょうと、鉄屑君をこのラボに連れて来たまでは覚えてるけど…」

束とクロエが共に睡眠を取る寝室にて、ベッドで寝かされていた束は飛び起きるや否や、眼を丸くする。確か秘密の侵入口にまで有象無象君（仮名）と鉄屑君を連れて来た。裏切られた時用に、入口の開封法を記憶できないよう、アレな薬をほんのり嗅がせて、いつの間にやらやってきた状態にもしている。おそらくあの時彼は所謂『ポルポル現象』を引き起こしていたのだろうが…。

「Ｄｒ．篠ノ乃。君は栄養状態が芳しくないみたいだね。その身長にしては、背負ったときの重みが余り感じられなかった。それでいきなり貧血なんか起こすんだ。」

「むっ…！女の子に体重に関してどうのこうの言うのはどうなのかな？」

「全くです。デリカシーが足りません。」

束の反感を買った。
クロエの反感を買った。
二人に睨まれる（一人はそうであろうという感じだが）等という、正直肩身の狭さを感じる中、貧血などという嘘のために体重という言葉を出してしまったことに後悔する。
ともあれ
これ以上の話の腰を折らないためにも、コズワースは格納庫らしき場所に放置している。
「んっん！とにかくＤｒ．篠ノ乃。先程君は言ったね？『こんな腐った世界を壊す気があるか？』と。あれはどういう意味だ？」
「ん？そのまんまの意味だよ？こんな世界のシステムなんかぶっ壊したいんだけど…もしかして信用されてないかな～？」
「当然だろう？ＩＳに妻と子を奪われて、その開発者で、しかも結果として女尊男卑という社会を生み出した貴女を信用しろ、と言うのはどだい無理な話だと思うが？」
身体の後ろで見えないが、ぎりっと拳を力強く握り混む。
あの日…
炎に包まれるサンクチュアリ。

逃げ惑う人々。
ＩＳに命を絶たれる街人、そして最愛の妻。
そして連れ去られた幼い愛する息子。
全てが悪夢だった。
全てを奪い取られた。
それを生み出した元凶が目の前に居る。
「そう、だよね。まぁ…今の社会を生み出したのは、束さんだというのは否定できない、事実だよ。」
でも、と束は言葉を繋ぐ。
「元々私がＩＳの開発したコンセプトって、君は知ってたりする？」
「…軍属時代に聞いたことはある。…確か宇宙進出の為、だったか？」
「そう。その為のＩＳ。無限の成層圏、その先へ向かうためのマルチフォームスーツ。そう発表したよ。でも子供の絵空事だって一蹴されたよ。悔しかったなぁ…。認められないのが認められなくて。…でも、若気の至り、なのかな。それが原因で私は…『白騎士事件』を起こしたんだよ。」
日本を射程に収める二千発以上の軍事ミサイルがハッキング、発射され、それを白騎士と当時見た軍が名付けた謎の機体によって全てが撃ち落とされた事件。

なる程、つまりあれは…結果として自作自演だったと。そう言うことか。
「君は…、君は、自分がしたことを解っているのか!?下手をすれば、人が、街が、取り返しの付かない事になっていたんだぞ!」
「解ってる!解ってるよ!白騎士のことも踏まえて、もし失敗したら、とか、そう言ったことを微塵も思わせないほどに、自信過剰だったのは今になって自覚してる!でも…、私が産みだしたＩＳを…皆に認めて欲しくって…皆に宇宙に目を向けて欲しくって…そう思って、ＩＳの製作用のデータを世界に発表したのに…!世界の愚者共は、兵器としての有用性にしか目を向けなかった!誰も…宇宙へ目を向けてくれなかった…!」
　気付けば泣いていた。
　ＩＳが認められなかったとき…ＩＳが兵器として世界に蔓延したと解ったとき。それくらいしか泣いた記憶が余り無い。余り泣くことがなかった人間だと自覚はしていたが、一人の時や、友人たる千冬の前ではともかく、初対面の人間の前で泣くことなどなかった。
「私は、こんな女尊男卑の世界を望んでいなかった…。男も女も、老いも若いも、皆が宇宙という、無限のフロンティアに夢を馳せ、ＩＳによって宇宙を駆けることを望める。そう思っていたのに…。」
　もはや決壊したダムの水のように、止め処なく自身の思いが吐露されていく。幼い

頃、友人達と夢見た、満天の星空が広がる果てしない宇宙。その為に産みだしたＩＳ。それが歪んだ世界の基盤となっていようとは、当時望みもしなかった。

「…だから、世界を壊す、と?」

「…うん。その為に、君の力を借りたかった。…でも、ＩＳに大切な物を奪われた君に束さんが頼むのは酷だね。…無理強いはしない。なんなら、さっきの場所に…」

「いや、協力しよう。」

思わず、束は眼を丸くする。

最近耳掃除していなかったからなぁ…と、耳の穴を小指でほじほじし…。

今何と…?

「今何と?」

どうやら思ったことを口にしていたようだ。

「協力しよう、そう言ったんだ。…もしかして、そのウサギの耳は飾りかな?」

「し、失礼な!これは箒ちゃんレーダープロトタイプなんだよ!これに耳なんて機能は飾りなんだよ!偉い人にはそれが解らないんだよ!」

「…兎にも角にも、君の世界を壊す、と言う思念に同意しよう、と言うことだ。」

「な、なんで?束さんをＩＳを…」

「だからって、君が女尊男卑の為に開発したわけじゃないのは解っているよ。悪いのは

ＩＳでも君でもない。女性にしか使えないという優位性で、世の女性全てが優遇されていると勘違いしている連中と、ＩＳの用途を間違っている奴らだ。」

ネイトは言う。

ＩＳが使えても、それだけでは偉いというわけではない。数の限られたＩＳ。それを乗りこなすためには、倍率が恐ろしく高いＩＳ学園に合格し、訓練を積んで、そのうえで優れた成績を残した者だけが使用できるのだ。いわば、努力を重ねた者だけがＩＳを身に纏う事が出来る。

つまり優遇されるのは、ＩＳの為にたゆまぬ努力をかさねた者であり、女性だからといって男性より優位性があるかと言えばそうではないのだ。最も、ＩＳを持ったからと言って、偉ぶって良いわけではないのも確かではあるが。

そして、ＩＳを兵器としか見ない各国の上層部もだ。アラスカ条約でＩＳの兵器開発はしないやら云々締結しているにも関わらず、その実、高いテクノロジーを詰め込んで、如何に相手の力を奪い、如何に相手の上に立てるかを模索している愚者と思しき行為。もはや条約など、半ば形骸化しているようなものだ。

それだけに、世の全てが壊れている。いや、未だ辛うじて形を保っている、と言うものだ。ふとした拍子に世界は壊れ、下手をすればＩＳによる戦争に加え、そこの漁夫の利を突いて、世の中の男性が決起して、全世界ありとあらゆる場所で紛争が引き起こさ

れる。そして次に待つのが旧兵器による戦争。戦闘機や戦車。挙げ句は大量破壊兵器の使用。世界中に広がった戦争の火種は、その勢いを止めること無く、溜めに溜め込んだ力を出し尽くして、全てを焼き尽くすまで終わらないだろう。

最終的には…そう。核による全面戦争。大地の全てを焼き尽くし、汚染しても止まない兵器。それによって地球は焼かれる。徹底的に。

「だからこそ、それを止めなくてはならない。僕らは小さな力かも知れない。でもそれを止めることは諦めること。この世界を戦争で焼くなどと、人の過ちは起こしちゃいけないんだ。」

「ネイト様…」

ずっと黙っていたクロエも、彼の語りに思わず名を零す。

自身も、戦争の道具たる兵士として生み出されるはずだった存在（失敗作）だから。自身のような存在を生み出してはならないと。そう思うからこそ、ネイトの言葉に共感できてしまう。

「…まぁ、君の言う世界を壊す、と言うのは、女尊男卑の風潮と、ＩＳという『兵器』を壊す、と言うことだろう?」

「…そこまで解っているなら話は早いね。」

「だったら、僕らは同志だ。共に戦おうＤｒ．篠ノ乃。」

「東。」
「ん？」
「東って呼んでよ。同志なら、さ。」
「そうだな。少々他人行儀過ぎたか。よろしく頼むよ、東。」
ガシッと、見つめ合い、そして握手する二人。
さぁ…これからが本番だ。

束を喜ばせた。
クロエを喜ばせた。

「そうそう。もう少ししたら、世界を覆すイベントを起こすつもりなんだよね。」
「世界を覆す…」
「イベント…？」
そろって首をかしげるネイトとクロエ。そんな二人にドヤ顔でしてやったりと言わ

んばかりに、フッフッフ…と、束はあくどい笑みを浮かべる。
「それは…秘密だよ？くーちゃんにネーちゃん♪」
「ネーちゃん…？それはさすがに…」
「えー？可愛いと思うよ？束さんが愛称をつけるなんて、よっぽどのことがないと起こり得ないんだからさ？」
「断固として拒否するぞ！考え直してくれ！」
「じゃあ…ネイさん？」
「それは色々とマズいだろう？」
「文句が多いなぁ…だったら…」
こうして、時間は過ぎていく。
時は1月。
この一ヶ月後に、世界を揺るがすニュースが流れようなどと、束以外に知る由も無かった。

第３話『ＩＳ学園』

「ふふふ…予想外のことは起こるもの。」
　どこからともなく取り出した深緑の扇子を口許に当てて、彼女は眼を細め、そして乾いた笑みを浮かべる。
　彼女の居るラボ。数ヶ月前までは乱雑していたこの部屋も、今はホバー飛行している白い悪魔によって綺麗さっぱり片付いている。
『正直、そのネタが解る人は少ないと思いますが?』
「細けぇこたぁいいんだよ!兎にも角にも、この束さんの予想を超越する物が現れたら、こうもなるよ!」
『ほほう?貴女様を、して予想を超越すると言わしめるとは?』
　この二人、篠ノ乃束とコズワース。初対面こそ最悪の物だったが、ネイトによるシリンジャーとハッキングによって、あのいがみ合いがウソのように気の合う二人となってしまった。
「…いっくんのパーソナルデータに合わせた打鉄だけが起動するようにしたまでは良かったんだよう!そのあと、起動するはずもないのに政府の馬鹿共が一斉に男の起動テ

ストをするのも予想できていたさ！」

先日言っていたサプライズ…束の友人の弟である織斑一夏がＩＳを起動させるという、世界を揺るがす事件に一枚噛んでいた束。その後の展開も読んではいた。しかし、

「何で…何で2人目が見付かっちゃうかなぁっ!?」

まさかの発見に、さしものマイペースな束も混乱していた。

全く予想だにしなかった展開。

全世界一斉ＩＳ起動テストにて、2人目が発見されたという。

「何やらまた束は荒れているようだね。」

「束様、ネイト様が昼食を用意して下さいました。一旦食事に致しましょう。」

「わぁい！食べる食べるぅ！」

先程までの錯乱振りは何処へやら。飛び付くように席に着いた束の目の前に、サンドイッチや野菜スープ。何かの肉のローストが並べられる。最後の逸品に対しては、誰しも何の肉か気になるだろうが、食事を作ることが出来ない束や、卵焼きをかわいそうな卵へと変貌させてしまうクロエにとっては、理解の範疇外。嬉々としてその料理達を口に運んでいく。

実際にこの場で料理できる人間と言えば、ネイト以外にコズワースだけであり、篠ノ乃姉家の二人の女子力の低さが明確に現れるものとなった。

「ん～、今年はＩＳ学園に箒ちゃんといっくんが入るって言うのが一大イベントなのに…誰なんだよこの２人目！」
「束。食事中は静かにした方が良い。女子としての品を問われるぞ。」
「むむむ…！ネイ君がお父さんみたいだよぅ…。」
「あいにくと、事実として父親だからね。…本来、ショーンに言うべきなんだろうが。」
「その…ごめん。ネイ君の子供に関しては、束さんも頑張って探すからさ。大船に乗ったつもりでいてよ！ね？」
「あぁ。頼りにしているよ束。」
　柔らかな笑みを浮かべるネイトだが、その実、何処か寂しげな目をしているのを、束は見逃さなかった。当然だろう。いるべきハズである自身の息子が居ない。そして愛する妻も居ない。居るのは執事ロボットのコズワースだけ。孤独感に苛まれているのだ。励ましたつもりの束だったが、逆に彼の孤独感を目の当たりにさせられていた。
「ところで…男性操縦者が２人目、と言ったね。どういう人間なんだい？」
「彼？えっとねぇ…」

ＩＳ学園。

東京湾に人工島から建設された、ＩＳ操縦者の養成学校だ。アラスカ条約に則り、建設費から運営費まで、すべてを日本の国民の血税によって賄われている。

そしてありとあらゆる国からの入学生が在籍する中、セキュリティも現最高段階の技術を用いて万全を期しており、その維持費もまた日本国血税だ。

そんな異質とも取れるこの学園。生徒の９９％が女子だ。と、言うのも、言わずもがな、ＩＳの女性にしか動かせない、と言う特性から来るものだ。

だが、残りの１％とは？

（か、帰りてぇ…。）

周囲から、まるでファンネルのように全方位からの視線が突き刺さり、彼は俯いたままにダラダラと脂汗をかく。

彼にしてみれば拷問。

しかし、周囲の女子からしてみれば、興味の対象、もしくは侮蔑の対象。前者はそのままの意味で、ただ女子ばかりの空間に一人居る男子に注がれる興味。後者においては、女尊男卑の風潮に染まった者から。両者にとっては目を輝かせる者と、そして鋭い目を向けるものとでよく見分けが付くのも確かである。

彼、織斑一夏はそんな空間に放り込まれた狼。いや、周囲が狼で彼自身が羊なのかも知れない。

「はーい！それでは皆さん、朝のショートホームルームをはじめますよ！」

山田真耶、壇上に立つ！

今日のタイトルはこれで良いだろう。

などと、一夏が訳のわからないことを考える内にも、

よろしくお願いします

と山田副担任が声を掛けても返事がないなどと言う、彼女にとってのショッキングなイベントは過ぎていく。

（あ、ありのままに起こったことを記すぜ…！

『藍越学園の受験会場に向かっていたら、なぜがＩＳを起動してＩＳ学園に放り込まれていた。』

な、何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった。

頭がどうにかなりそうだった。（ＩＳを起動したときの情報量的な意味で。）

超展開だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねぇ！

もっと恐ろしい、何者かの陰謀を感じたぜ…！）

「…りむらくん…おりむらくん？織斑一夏君？」

「ふぉっ!?は、はい!!」

いきなり至近距離で名前を呼ばれたものだから、ビクッと、そしてその勢いで机をがたっと跳ね上げさせてしまう。自身の立てた音にビックリしながらも、目の前に居る童顔巨乳副担任である山田真耶が、半泣きで自身を見つめていた。

「い、いきなり大声を出しちゃってごめんなさい！お、怒ってます？げ、激おこですか？」

「い、いえ、ビックリしちゃっただけです。少し考え事を。」

嘘である。まぁ、こう言っておけば、慣れない環境に不慣れだと誤魔化すことが出来るから、咄嗟に考えついたのだ。

「そ、そうですか、良かった。」

純真な山田副担任はすんなり信じてしまい、それが一夏の良心を痛めるが、今更撤回できないので、

「と、ところで山田先生、何の用で…？」

最もらしいことで話題を逸らすに至る。

「あ、そ、そうですね。今自己紹介の最中なんです。『あ』から始まって、いま『お』なんで、織斑君の番が回ってきたんです。それで、読んでも返事がないから近くで…。そ、その、ごめんなさい。」

「そ、そうですか。その謝らないで下さい。ボーッとしていた俺が悪いんで。」

「あ、はい…そ、それじゃ、織斑君、自己紹介をお願いしますね。」
「は、はいっ。」
勢いよく起ち上がり、後方を向く。
実は、一夏の席。最前列ど真ん中。所謂教壇の目の前だ。それだけに、振り返れば目の前に女子の視線が一斉に視界に飛び込んでくる。これがある程度この場所からズレているならば、死角が生まれ、この視線も少しは緩和されるのだが…。
しかし、逃げ場は既に無い。賽は投げられたのだ。後はなるようになれだ。
（えぇい！ままよ！）
自身に気合いを入れ、口を開き、大きく息を吸い込んだ。
「お、織斑一夏です。よろしくお願いします…。」
気合いを入れた割に、若干尻すぼみになっていた。
「え、えっと…」
名を名乗っただけでは満足いかない物らしい。未だ耐え止まぬ好奇の視線に答えるべく、再び一夏は大きく息を吸い込み…
「以上です!!!」
一息分の一言で片付けた。
期待をしていた生徒と、同じく期待していた山田副担任もずっこけてしまった。

（もはや、語るまい…）

これ以上言うことはない。そう言わんばかりに座ろうとした矢先。

ヒュンヒュン…！

何やら風切り音が聞こえる。

それは他の生徒にも聞こえるらしく、キョロキョロと辺りを見回す。

それは段々大きくなっていき…

スコーン!!!

「アバーッ!?」

一夏の後頭部に見事何かがぶち当たった。涙目で振り返ると、黒い…四角の何かが当たったのか、宙を舞って居る。余程の勢いで当てられたのか、かなりの距離を跳ね返って舞っている。

そしてその黒い何かを、教室の入口に居る黒いスーツの女性が危なげなくキャッチする。

「全く…まともに自己紹介もできんのか、お前は?」

「げぇっ!?クラン大尉!?」

「中の人ネタは止めておけ馬鹿者。」

再び投げられた黒い何か。それが出席簿だと理解したときには、額に突き刺さって悶

絶する。
頭を抱える一夏を横目に、再び出席簿をキャッチする。
「すみません山田先生。会議が長引いてしまいまして。」
「い、いえ。大丈夫です、問題ありません。」
そうですか、と返して、彼女は教壇に立ち、クラスの生徒を一瞥する。
「諸君！私がこのクラスの担任となる織斑千冬だ！私の仕事は、君達を若干１５歳から１６歳に育て上げること！中学とは桁違いに念密な学業になるが、君達ならば付いてこれると信じている！良いか？解らなければ尋ねろ！解るまで教えてやる！解るならば、反復しろ！その分、己が糧となる！努力を怠るな！以上だ！」
おぉ、と、未だ痛む頭を押さえながら、一夏は自身の姉が教師をしていたことよりも、真面なことを言っていることに目を丸くし、そして感心した。
だが、彼は後悔する。
耳を塞いでおけば良かった、と。
『キ、』
「き？」
『キャァァァァァァァァァァッ!!!!!!!!』
突如として引き起こされた超音波に、一夏は混乱した！

「本物よ!!本物の千冬お姉様よ!!」
「あぁ！生きてて良かった！」
「お姉様！お姉様！あぁ！この距離でもお姉様のグッドスメルが鼻腔を…!!これで丼１０杯はイケる！」
「お、お姉様に会うために、ＮｅｗＶｅｇａｓから運び屋を止めて来ました!!」
もはや神格化と言わんばかりに黄色い悲鳴と喜びの声が響き渡る。
そう言えば自身の姉は、初代ブリュンヒルデだったな、と思い出す。
ＩＳによる、言わばオリンピック。それで総合優勝を果たした者に与えられる称号ブリュンヒルデ。それを持っているのだから。
「全く、毎年毎年、こうも自己紹介の時に騒がれるとは恐れ入る。それとも何か？毎年私のクラスにこんなミーハーとも言える奴らを集めているのか？」
『キャァァァァァァァァァァァァァッ!!!!!』
超音波再び。もはや一夏の精神と鼓膜の耐久値は危険域に達している。
「お姉様！もっと叱って！もっとキツい言葉で罵って!!」
「でも時には優しくして!!」
「そしてつけあがらないように躾けて、調教して!!」
（な、なんかヤバいクラスに放り込まれていないか？俺…）

自身の実姉に、こんな好奇且つ奇怪な視線と思いを向ける女子がたむろするクラスに若干危うさを感じざるを得ない一夏に、嫌な汗がタラリと流れる。
馬鹿にされても、それを御褒美などと思っているような…。
「…で？お前は自己紹介も真面にできんのか？」
「や、でも千冬姉。この状況で真面な…」
ボギャァ!!
出席簿がヤバい音と共に縦に一夏の頭に打ち込まれる。
…このままだと、これから学ぶべきことが入らなくなりそうだ。
「織斑先生、だ。」
「……。」
「織斑、私の名を言ってみろ」
「織斑先生…です。」
「以後気を付けるように。」
どうやら、修羅を沈めるに至ったようだ。
だが、周囲の女子からは、新たな疑問と興味が生まれる。
「え…？織斑君って、千冬お姉様の弟だったりするの？」
「も、もしかして、ＩＳを使えるのって、そう言ったことが理由だったりするのかな？」

「あぁ！良いなぁ！私とそのポジション変わって欲しい!!で、お姉様と毎晩ベッドで愛を……ウヘヘヘヘヘ…」

（おい最後の奴！変質者として警察に突き出すぞ！）

自身の姉をオカズにするなどと、この織斑一夏の目が黒いうちは絶対許さんばい！

そう意気込む中、千冬がショートホームルームを進めるために次の事項へと進める。

「それではもう一つ。実は入学生がもう一人居る。」

『へ??』

これには一夏も、皆と共に素っ頓狂な声を出してしまった。

確かに、自己紹介の時に見渡したときに空席が一つあったが、もしかしてそれのことだろうか？

だが、それならば何で最初から居ないのか？

もしかして、入学早々遅刻などと、目も当てられないことに？

だとすれば目の前に居る織田信長（千冬姉）に制裁を加えられてご愁傷様と相成るだろう。

「ちなみに、入学早々遅刻した、などと考えている者もいるだろうが、違うぞ？」

…あの第六天魔王は人の心でも読めるのか？

「ちなみに私のことを、天下布武を掲げていた武将と考えている奴、後で私の所へ来るように。」

ピンポイントで目の前に居る一夏を、口は笑いながらもじっと笑っていない目で見つめる姉に失禁しそうになるが、何とか堪え忍ぶ。
「この人物については少々特殊ケースでな。入学手続きに手間取ってしまい、少々タイミングがずれ込んだのだ。先程の職員会議が長引いた理由もそれだ。」
本当にギリギリまで話し込んでいたのか。昨晩遅くまで、そして早朝から話し込んだのだろう。千冬の目の下には隈が若干出来ていた。
「皆、私の愚弟共々、仲良くしてやってくれ。…では、入ってこい。」
プシュッと開かれた教室の自動扉。そこから現れた人物に、このクラスはざわめきと、そして混乱に包まれることとなった。

第４話『絡まれたアイツ、絡んできたアイツ』

入ってきた人物。

彼の第一印象は『濃ゆい』ただその一言に尽きる。確かに１５歳に辛うじて見えなくもないが、それでも自身と同い年と見たくない。白人と、そして短めでツンツンと立った金髪。そしてアメリカン特有の彫りの深い顔が目に焼き付く。

だが、特注の男子制服を着込んでいるにあたり、考えられることは一つ。

『ふ、２人目の、男?』

見事に異口同音。唖然とする。

「予想通り、だな。おい、自己紹介しろ。皆がお望みだ。」

「わかりました。織斑先生。」

少々発音に問題があるが、しかししっかりとした口調で応える。

「アメリカのＶａｕｌｔ１０１から来ました、ロン・ラーワンダーです。同い年に見えない、そう感じる方もおられるハズですが、それもそのはず、俺は１９歳です。ですが、皆さんと同じく、ＩＳ学園１年生という立場には変わり有りません。なので年上ということを気にせず、気軽に話して貰えたなら有り難いです。趣味は、ジャンクの修理。特技

は動物を手なずけること。苦手なことは走ることです。こんな俺ですが、宜しくお願いします。」

良く通る声で、ハキハキと自己紹介を済ませるロンと名乗る青年。第一印象は圧巻だったが、いざ口を開いてみれば何のことか、柔らかな笑みと共に親しみやすい印象を与えてくれた。

それだけに、どこからともなく拍手が巻き起こり、始めこそ小さなものが、やがて喝采と呼ぶに相応しい物までに大きくなっていた。

「うむ。わかったか織斑。自己紹介とはこう言う物を言うのだ。ラーワンダー、年上の面目躍如、と言ったところだな。空いてる席に着いて構わん。早速授業を始める。まずは…」

こうして、二人の男性操縦者を加えたＩＳ学園。その最初の授業が幕を開けた。

「えっと…ロンさん？」

休み時間

先程読んでいた教材。その授業内容を再読していると、声を掛けられた。見上げれば、少し戸惑いながらも話し掛けてくるもう一人の男性操縦者。
「キミは…イチカ・オリムラ、だったか？何か用かい？」
「え、えっと、同じ男性操縦者として、良かったら仲良くして欲しいなぁって思って…構わない、ですか？」
「ふう…。」
一夏の申し出に、ロンは深く、深く溜息を吐き出す。
「悪いが、イチカ・オリムラ。今の君とは仲良くなれそうにない。」
「え？それって…どういう？」
眼を細め、まるで睨むかのように、一夏を見つめるロン。その顔付きもあって、威圧的に感じた一夏は一歩たじろいだ。
「…俺を呼ぶときは『さん』と敬語は要らない。これからはクラスメイトとして仲良くなれたら良いと思っているんだ。立場は対等で居たい。…どうかな？イチカ・オリムラ。」
「あ、あぁ。じゃあ宜しく頼むよロン。そっちこそ、俺のことは一夏で頼むぜ？対等な立場、なんだろ？」
「あぁ、そうだな。宜しく頼むよ一夏。」
ロンが立ち上がり、ガシッと握手する二人。身長がアメリカ人の年上だけあってかな

りの高身長で、一夏が見上げる形となっていたが、不思議と苦にならず、だが寧ろそれが好ましく感じた。

「いい！いいわぁ！高身長のロン君と、ギリギリショタ枠の織斑君！」

「今年の夏はこれで決まりね！絡みはロン×一夏かしら？」

「いやいや！逆に織斑君が攻めで、ロン君が受けなんて言う、意表を突いた絡みも…！」

「…？一夏、彼女達は一体何を言っているんだ？」

何やら一夏とロンの握手を見て、人と人のかけ算をしている興奮した女子を見て、ロンは首を傾げる。目は血走っており、手に持った手帳に記すその手は途轍もなく早く、もはや人間業を超越した何かに見えた。そして口から溢れ出た涎が、ぼたぼたと手帳に滴り落ちている。

「ロン。日本には知らない方が身のための文化という物があるんだよ。」

深い、深い溜息を吐く一夏を見て、ロンは再び首を傾げる。

なまじ顔が整っている彼にはままある光景だった。

中学時代にも、自身と仲の良かった赤髪の友人と仲良く話す、それだけで同じような視線を向けられていたのだ。

五反田　弾

彼もまた、一夏と同じくして腐った女子達の餌食となりかけた少年だった。

「ちょっと良いか？」
日本文化への講義をしていると、一人の女子に声を掛けられる。スラリとした体ながら、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。そんな理想的なスタイルを持ったポニーテールの少女が立っていた。
「箒？お前、箒か？久しぶりだなぁ！」
「う、うむ。済まないがロン。一夏を借りていっても構わんか？」
「あ、あぁ。構わないが？」
「そうか、ならば一夏、付いてきてくれ、屋上あたりで構わんだろう。」
言われるがまま、箒と呼ばれた少女に連行されて教室を後にした一夏。一人残されたロンは、始業前に一夏が味わっていた責め苦を、意図せずして味わうことになる。
「こ、これは…中々…」
「ちょっとよろしくて？」
戸惑う中、一人の女子によってその意識を向けさせられる。
自身と同じく金髪。そして白い肌。だが、女子特有と言う物を加味しても高貴さを醸し出すきめ細やかな肌と、滑らかとも思える程に整えられた髪。
だが、その目は些か不快感を味合わせるものだ。
「ちょっと、聞いていますの？」

「あぁ、大丈夫だ。良く聞こえている。」
「まぁ！何ですのそのお返事は!?この私に話し掛けられているのですから、それ相応の受け答えという物があるのではなくって？」
「いや…そもそも君が誰なのかも俺は知らないし。」
「な!?私を知らない!?この私を!?イギリス代表候補生であるセシリア・オルコットを!?」
　知らないと答えただけでこの体たらく。もはやヒステリックの域に入らんばかりに芝居臭く額に手の甲を当てながら、貧血が立ちくらみでも起こったかのようにフラフラと回る。
「…大体、俺は君達の自己紹介を聞いていないし。顔だけで判断と言うのも難しいだろう？」
「ぐ、ぐぬぬ…！男が私を論破するなど…！い、いえ！そうですわ！貴方、ニュースや新聞は読みませんの!?」
「テレビか。…其程までに興味は無いな。新聞だって特に読まないし。情報収集の要はラジオだ。」
「ら、ラジオ、ですの？」
　映像もない、音声のみの情報伝達媒体であるラジオ。新聞ならばまだしも、まさかのラジオなどという、予想を上回る答えに、セシリアは絶句する。

「ラジオと一言で済ませるのもよくないぞ？聞いたことないか？スリードッグの、ギャラクシーニュースラジオ。俺はあの番組がお気に入りでね。中々興味深いゴシップも語ってくれるし、それにスリードッグの語りも筆舌に尽くしがたい。そして何よりも…」

「あ、あ～！もう！宜しいですわ!!」

語り出したら止まらないロンのラジオ講義に、セシリアは苛立ちを隠さずに止めるに至る。

まだまだ語り足りない、そう言いたげな彼を見て、彼女はますます機嫌を斜めにする。

「全く…貴方の故郷は一体…。…！」

ロンの故郷、その話題を口にした途端、何かを思い出したかのようにセシリアは口をつぐむ。そしてややあって、侮蔑的な視線を向けてニヤリと笑みを浮かべる。

「なるほどなるほど…、そうでしたのね？そう思えば貴方の世間知らずな所も納得できますし、品のなさにも頷けますわ。」

「…何に得心したのかは知らないが…」

「お黙りなさい。もはや貴方と語る言葉も、貴方が私と話す資格もありませんわ。」

言うだけ言って、セシリアは踵を返して自分の席に戻っていく。

まるで嵐のようだった。

そして丁度タイミング良く始業のチャイムが鳴り、千冬と真耶が入ってくる。
なお先生陣に数秒遅れて入ってきた屋上二人組に、出席簿による制裁が下ったのは言うまでも無い。
「さて授業を始める前に、再来週に執り行われるクラス対抗戦の代表を決めないといけないな。」
「織斑先生、対抗戦の代表、と言うのは?」
すっと挙手したとある生徒が、幾人の生徒の疑問を代弁して尋ねる。
「読んで字の如く、各クラスで1名代表を選んで、それぞれ戦って貰う、と言うものだ。他にも代表として、クラスの雑務の一部をして貰う…まぁ諸君らが聞き慣れた言葉ならば、委員長、と言えば得心がいくだろう。では、誰か立候補者は居ないか?他推薦でも構わんぞ?」
大抵、こういった自身の代表を決める、と言った催しには、大人とは違って学生は、『選んだら面白そう』と言う理由で選び出すことが多い。このクラスで、大半の女子から興味の対象となっている人物、それ即ち、
「はい！織斑君が良いと思います！」
「私も織斑君推しで!!」

「じゃ、私はロン君で！」
「私も私も!!」
　こうなるわけだ。２／全世界女性である２人を推さないわけがない。わいのわいのとあっという間に一夏とロンとでクラス票数は二分される。
「大変だなロン。千冬姉と人気を二分するなんて中々凄いと思うぞ？」
「そうか。まさか織斑先生とクラス代表の対抗馬に選ばれるとは光栄だな。所で…ニホンにはこう言う諺があるらしいな？」
「ん？」
「オリムラ～ウシロウシロ～」
「あん？後ろが何だって？」
　ロンの棒読みに答えて振り向いた瞬間、立っていた黒い不動明王、その出席簿による縦一閃が一夏の脳天に振り下ろされ、他人にとっては心地良いほどの乾いた音が鳴り響いた。
「お、おぉう…！」
「織斑先生、た。それに、教師である私がクラスの生徒代表に選ばれると思うのか？ん？普通わかるだろう？」
「ず、ずみまぜん……！」

「さて！織斑とラーワンダー、この二人が挙がっているわけたが、他にも居ないのか？」
「ちょっ…！俺はやるなんて一言も…！」
「他推された者が拒否権を持てると思うなよ？」
「横暴だ！独裁だ！」
「五月蠅い黙れ話が進まんだろう。」
　再び振り下ろされた出席簿。それによって一夏の頭には、雪だるまヨロシク、二段の綺麗なタンコブがその姿を現していた。
「待って下さい！納得がいきませんわ！！」
　机を両手で叩き付け、乾いた音と共に起ち上がるは、先程ロンに絡んできたセシリア・オルコットだ。先程の口調と今の表情から、怒りの炎がメラメラと燃え上がっているのがよく分かる。
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ！この私、セシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?」
　一夏は唖然としているが、ロンにとっては『やはりか。』と、なるべくしてなり、言うべくして言うであろうと考えていた言葉を耳にした。
「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で

極東の猿と、そしてアメリカのドブネズミにされては困ります！私はこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ありませんわ！それに、クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはイギリス代表候補生である私です！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で…」

最早、自身が如何に素晴らしいか、そして如何に男を選出するのが愚かしいことかを声高々に宣うセシリア・オルコット嬢。だが、この高飛車と、そして男を見下した発言は、一つの火種となる。

「イギリスだって、たいしたお国自慢ないだろ？何年メシマズ王国覇者だよ？」

織斑一夏だ。

元々気さくで、誰にでも優しいハズの彼だが、少々短気な所もある。それゆえに、自身と、そして自身の暮らす国を晒されたことによって、少々頭にきていた。

「あ、あ、あ、貴方！私の国を馬鹿にしますの!?」

「元々そっちが日本を後進的な国だとか言ってきたんだろう？それに、イギリスだって島国だろ？日本の地図からしてみれば、イギリスは極西の島国と言えるぜ？」

まぁ世界地図、と言う物は、自身の国やその周辺を世界の中心にしたがるわけである。元々これは、小さな子供が、自分の国の周辺各国を覚えやすいようにした、と言う試み

でもあるわけだが、互いの国の世界地図を見比べてみれば、双方の言うとおり、極東と極西に位置する国となっているわけだ。

「け、決闘ですわ！クラス代表の座をかけて！私の国の威信をかけて、貴方に決闘を申し込みます！」

「おう！四の五の言うよりわかりやすい！」

「そこの黙っているネズミさん？貴方もですわよ？」

今まで黙っていたロンに焚き付けるように、セシリアは高圧的に巻き込む。女性である自身に反抗した一夏に対する怒りそのままに、その矛先を彼にまで向ける。

「まぁ？地下で細々と生活していた貴方のことです。空を飛べるＩＳなどと不相応な物に手を伸ばさず、国にお帰りになってモグラと仲良く生活しているのがお似合いですことよ？」

「おい、オルコット。」

「何ですの？織斑先生。事実を言って差し上げているのですわ。そもそもこの中には、彼の出身であるＶａｕｌｔと言う物に興味を持っておられる方もおられるのですから、その辺りを詳しく…」

「…いい加減その口を閉じろ。英国野郎。」

威圧的に、そして静かに紡がれたその言葉にセシリアは、その顔を引き攣らせていく。

先程まで大人しく、そして静かにしていたロン。彼から先程までの穏やかな物とは違い、鋭く、凶暴的な、まるで獣のような雰囲気を放っていたのだ。

「お前にＶａｕｌｔ居住者の何が解る？周辺をＩＳによって使用された兵器で汚染区域にされ、命辛々Ｖａｕｌｔに逃げ込んで、そこで苦渋と外への願望に塗れた生活を送る俺達の何が解る？」

Ｖａｕｌｔ、と言う物は、世間一般に余り知らない単語だ。

と言うのも、女性権利団体のＩＳによる蹂躙。それによってＩＳ側が使用した新型の小型核弾頭。その威力で、数多の街は滅び、生き延びた人々は、緊急シェルターとも呼べるＶａｕｌｔに身を寄せて生活。汚染区域に出ないように国からの厳命の元、細々とした地下生活を送っていた。ロンもその一人で、数年前にＶａｕｌｔへと避難して、それ以来青い空を見ること無く生活していたのだ。世間一般でＶａｕｌｔの名が知られていない、と言うのは女性権利団体の手によって情報操作されているに他ならない。

そして、男性操縦者発見のための試験はＶａｕｌｔの男性にまで執り行われ、その中でロンが起動させたのだ。それを鑑みるに、藁をも縋る思いで汚染区域のＶａｕｌｔにまで試験を執り行ったのだろう。

「お前は温々と女尊男卑に染まり、その上で裕福な生活を送り、剰え俺達Ｖａｕｌｔ居住者をモグラやドブネズミと言うのか？女尊男卑に染まったヤツらの手によって、地下生

活を余儀なくされた俺達に？」
「わ、私は事実を…！」
「事実だから何を言っても構わない、と？…エレメンタリースクールの子供も、そんなことは言わないだろう。…それに、日本という国を後進的な国と言っても居たが、ＩＳの開発者は誰だ？初代ブリュンヒルデは？」
「ぐ…!!」
「双方、そこまでにしておけ。」
　暫く口をつぐんでいた千冬が割って入る。
「続きの口論と、そして決着は、ＩＳによるクラス代表決定戦でつけて貰う。良いな？」
「…了解。」
「わ、わかりましたわ。」
「日時は１週間後の月曜日放課後。使用アリーナについては後ほど伝達する。…それでは授業を始めるか。」

「ねぇねぇ、ロンロン～。」
先程の怒りがようやく冷めてきた頃。
再び授業の反復をしていたロンを、間延びした声が呼び止める。キョロキョロと周囲を見回しても誰もおらず、再び教本に目を落とす。
「ロンロン～。下を見てよ～。」
「ん？」
見下げれば、自身の机の下、座った脚の間からのぞき込む一人の女子。たぼだぼの服に、間延びした口調。ちょっと垂れた目元から、如何にものんびり屋のオーラを出している。というか余程小柄なのか、良く入れたものだ。
「ロンロン、お菓子もってる？」
「お菓子？…スナックのような物か？」
「ん～、どっちかと言えば甘い物が好き～。」
初めて話し掛けた相手に菓子を強請り、剰えそのジャンルを指定してくる。だが不思議と苛立ちは覚えず、まるで子供がお菓子を強請る様に見えた。
「わかった…えっと、これなんかどうだ？」
赤い箱が特徴的なお菓子。細く、長いビスケット。その八割にチョコレートが塗られた国民的お菓子の代表格。ポッキャーだ。

「わーい！ポッキャーだぁ！ありがとーロンロン～！」
　早速箱を、ＣＭの『オープン！パララ！』と言わんばかりに小気味よい音と共に開封。中の銀色の小袋を開けて、早速ポリポリと食べ始める。
　やれやれ、このままだとすぐになくなりそうだな、そう考えた矢先だ。
「はむ？」
　口に細い何かをくわえさせられる。次の瞬間、甘くも、そしてどこかほろ苦さを感じられる味わいが口に広がる。そして噛んでみると、カリッとした心地良い歯ごたえと共に、サクサクとした食感が伝わる。
　それが、先程の女生徒に渡したポッキャーだというのに気付くのに、そう掛からなかった。
「ロンロン、ちょっとむつかしい顔してたよ～？さっきセッシーに言われたことを気にしてるんでしょ～？」
「…む、まぁ否定はしないけど。」
「イライラしたときには甘い物～、これはロンロンだけじゃなくて、全人類共通だからね～。それに～、ロンロンやいっちーが言い返してくれて、みんな少し嬉しかったみたいだよ～？このクラス、日本人多いからさ～」
　そう言うと、彼女はだぼだぼの袖を振ってポッキャーを咥えながら自分の席に戻って

いく。

「やれやれ、年上として如何なんだろうな。」

ポリポリと残りのポッキャーを貪りながら、少々大人気なかった自分に反省の念を押す。

だが、自分は謝らない。

それは決闘が終わってからにしよう。

1年間、勉学を共にするクラスメイトなのだから。

第５話『デカいアイツ、眼鏡のあの子』

恙無く終えた1日目の授業。

慣れない環境、そして密の高い授業。

西日差し込む放課後の教室にも関わらず、未だ沢山の女生徒が廊下や教室内で一夏とロンから距離を置いて、まるで観察日記をつけてでもいるかのように好奇の視線を向けている。ぐてっと机に伏す一夏と、椅子にもたれて半ばグロッキーなロン。周囲からの視線による緊張から来る精神的疲労で、もはや虫の息だった。

「もう…だめだ…。一日でこれじゃあ、俺三年間も耐えられそうにないよロン…。」

「耐えろ一夏。もう放課後だ。俺はホテルに、君は自宅に帰れるじゃあないか。そうすれば、少なくとも周囲からの集中視線に晒されずに自分の空間を構築できるぞ。」

「それも1週間だけだけどな。」

入学当時、男子操縦者という特例である2人の部屋を用意するため、その日から1週間は自宅、若しくは近場のホテルからの通学と説明を受けた。

1週間という短い期間に一夏は嘆くが、少なくともその間に少しずつこの環境に慣れる事が出来る。流石に四六時中、女の園で過ごすというのは苦行に近い。だからせめて

自身の時間が持てる、というのは精神的に休まることが出来ることを意味する。
しかし、
「あ、よかった！お二人ともまだ教室にいたんですね！」
それは儚くも無惨に崩されると、誰が予想しようか。
「実は、お二人の入寮する部屋の鍵を渡そうと思っていたんです。」
「なん…だと……」
人間だけが神を持つ。そう思っていた時期が、一夏にもありました。
だが神は居なかった、そう心中嘆いた。
「お、俺、1週間は自宅通学だって聞いてたのに…!?」
「それだがな、お前達の立場を考慮して即入寮するために調整したんだ。今やお前達二人は、世界的に有名な二人だからな。良くも悪くも狙われているだろうし、自宅など特に押さえられるだろう。」
「それは確かにそうですが…。」
無論、二人の身体を調べんとするマッドなサイエンティストや、不穏分子として排除しようとする過激な女性主義者もいるのだ。警備が厳重である学園はともかく、外では何が起きてもおかしくはない。
「それは決定事項…ですかね？」

「無論だ。」
「じゃ、とりあえず一度は家に戻って荷物を取ってこないと…。」
「俺もホテルに戻っても構いませんか？ホテルに必要品を置いてきているので…」
「それについては問題ない。ラーワンダーについては、荷物をホテルから輸送して貰ったし、織斑においては、私が纏めておいた。着替えと…そうだな、携帯の充電器があれば今の所大丈夫だろう。必要な物があれば、休日に外出届を出して取りに行って貰うことになるが。」
「ま、まぁ確かに問題ないっちゃないけどさ。千冬姉、服はちゃんと畳んで入れてくれたか？」
「……織斑先生と呼べ。」
「オィイイイイ!?何だよ今の間!?アレだな!?とりあえずクローゼットやタンスの中身を手当たり次第引っ掴んで、バッグや袋に詰め込んだんだな!?バーゲンセールで詰め放題やってるオバチャンの類みたいに！」
「……いや、そんなことないぞ。うん。大丈夫だ、問題ない。それと私は一応二十代だ。オバチャンの概念を押し付けてもらっては困る。」
「じゃあなんで目を逸らすのか、その理由を聞かせてくれよ!?」
「西日が…まぶしくてな。」

「なに女々しいこと言ってんだよ!?」
「失礼な！私はれっきとした女だぞ!!」
「そう言うのは、せめて洗濯を真面に出来るようになってから言えよ!?」
なぜか始まった姉弟喧嘩。
それを近くで見ていたロンと真耶は、その剣幕に唖然としていた。特に、真耶に関しては、普段厳格な先輩であり同僚の千冬が大人げもなく弟と口喧嘩しているのだから、ギャップが凄まじいのだろう。
「と、とりあえずラーワンダー君、寮の鍵、渡しておきますね。」
「あ、はい。ありがとうございます山田先生。」
「お二人に関しては、ほっといても構わないと思います。ほとぼりが冷めたら鍵も渡しておきます。…一応、織斑君とは別部屋なので、それだけは言っておきますね。」
「「は??」」
今まさに千冬と勝ち目のないもみ合いになりかけていた一夏もそれを止め、ロンも含めて真耶を凝視する。
「いやいやいやいやいや、山田先生。明らかにあからさまに男2人がいて、それを別室にするってどういう了見ですか!?」
「確かに…十代半ばにもなる男女が同室というのは頂けないな。俺も来年には二十歳

だ。どちらかと言えば、女子と組むよりも一夏との同室を所望するし、普通に考えればそちらが妥当だと思います。」

２人の言うことは正論だ。

二人はいわば十代の括りの中に居る。ただでさえこの環境に疲弊している二人が、部屋での時間まで女子と同じ空間で過ごさねばならないともなれば、その精神的なストレスたるや推して知るべしだろう。

「ごめんなさい。その…なにぶん急拵えでお二人をねじ込んでしまったので…」

「ね、ねじ込む…？」

「あああ綾です綾！言葉の！」

真耶も疲れているのだろう。何せ男子の操縦者の登場など、１年前まで考えられなかったのだから。それを、実質的に女子校であるＩＳ学園に住まわせるともなれば、その調整も推して知るべきだ。…見れば、千冬と同じくして真耶も若干隈が出来ている。

「…まぁ暫くすれば部屋も、そして大浴場の調整も出来る。だからそれまでは辛抱してくれれば、こちらとしても有難いのだがな。」

「…わかったよ千冬姉。山田先生も頑張って俺達が出来る限り過ごしやすいようにしてくれたんだ。それに答えないと男が廃るぜ。」

「…そうか。それはそうと織斑、男としての矜持を語るのは良いがな。」

今日一日で何度聞いたか。強烈な破裂音にも似たそれは、放課後といえど容赦なく響き渡る。
「どさくさに紛れて言うのを見逃すと思うか?織斑先生だ。」
「一夏。少しは学習した方が身のためだぞ。」
「ロン…お前もか…。」
最早味方はいない。その事実に一夏はガックリと肩を落とす。
「そう言えば山田先生、さっき大浴場の調整って?故障でもしているんですか?」
「…少しは考えればわかるだろう?ここは元々女子校だ。それ故に入浴時間は決まっていない。そんな中で男子であるお前達が入ってもみろ。」
「……嬉し恥ずかしのハプニング発生…。」
「それだけならばまだ良い。下手をすれば、警備組織に御用だぞ。」
「わ、わかりました。…暫くはシャワーでも生きていけますので。」
「…わかれば宜しい。」
「…残念だな。ニホンのフロ、と言う物を楽しみにしていたんだが。」
「それもしばらくの辛抱ですよ。ここのお風呂は本当に広いので、楽しみにしていて下さい。」
「あとは…そうだな。食道の各利用時間や消灯、就寝時間については、生徒手帳に記載さ

れているから、後で確認しておくように。」
「それじゃあ、お二人とも寄り道しないように帰って下さいね？」
　教師の二人が退室すると、残されたのは２人の男、そして遠巻きに見る未だ飽きていない女子生徒。一夏からすれば、いい加減そのメモを取るのを止めてくれと懇願したい。
（夕方の教室に男子生徒２人…そして他には誰も居ない。）
（『一夏、俺は今日会ったばかりのお前に…』）
（『待ってくれよロン。その先は俺から言わせてくれ！』）
（『一夏…！』）
（『ロン…！』）
（『一夏…!!』）
（『ロン…!!』）
（『アッー!!』）
（これよ！これなら今年の夏は確実に完売しました、を出来るわ！それも開始１時間で！）
（じゃあ私は早速、ラフを描いてくる!!）
（待って下さい先輩！私、今から漫研に入ります！）

（良いわよ！入部届は後で受領するから、今は即戦力として加わりなさい！）
（ＹＥＳ！Ｍａ，ａｍ!!）
　小声で言っているつもりが、２人には丸聞こえで、青ざめる一夏と、やはり首を傾げるロンを残して、女子達は怒濤の勢いで立ち去っていった。
「…ニホンのヤマトナデシコ、というのは、中々面白いな。」
「いや、あれをヤマトナデシコなどと言えば、箒にかなり失礼だから。」
「…えっと、ホウキというのは…確か昼間に一夏を呼びに来ていた子か？」
「あぁ。何せ実家が神社だからな。文字通り折り紙付きだぜ。」
「そうか。確かにニホン特有の綺麗な黒髪だった。…本で読んだとおりだな。…しかも、あぁ言うのを『モノノフ』と呼ぶのか？刃物のような鋭さすら感じられる。」
「それも確かにな。神社の経営と平行して、父親が剣道の道場もしていたし。しかもアイツ、全国大会優勝者だぞ？」
「なるほど…！ヤマトナデシコとモノノフ、ニホンの男と女の矜持を兼ね備えた、まさに男女（オトメ）なんだな！」
「…それ、本人の前で言わない方が良いと思うぞ。小さい頃、それが原因で虐められていたからな。」
「そう、なのか。褒めたつもりなのだがな、気をつけておこう。」

「あぁ、そうしてくれると、幼馴染みの俺からしても助かるよ。」
そんな幼馴染みの話をしながら、二人は寮への通路を歩いて行った。
しかし、寮の敷地に入ると一変…
「一夏君とロン君!?」
「わっ!?私格好変じゃない!?」
「ムッハー!女の巣に男が!据え膳食わねば女が廃る!」
「今は駄目よ、今は、ね。」
するかと言えばそうでもなかった。寧ろ変わったと言えば、周囲の服装だ。女子ばかりの空間だったからか、かなり砕けた服装ばかりなのだ。かなり短いスカートだったり、キャミソールだったり、大きめのＴシャツ１枚だったり、更になんだ？特定の人を狙っているのか、Ｙシャツなどと…。男２人にとっては、かなり目の毒。オープンなスケベならばガン見するだろうが、生憎とシャイなこの二人にそれは無理な話だ。なるべく直視しないようにして、鍵に記された部屋番号と扉の番号を照らし合わせていく。
「１０２５…ここだな。」
「俺は１０２９…もう少し先だ。」
「じゃあロン。後で一緒に晩飯食いに行こうぜ。」
「了解。じゃあ通路的に俺から迎えに行こう。その方が一夏が折り返さなくて良いから

な。」

「おう。……それじゃ……イチカ・オリムラ…行きます！」

意を決し、手持ちの鍵を差し込んで解錠。まるでロボットアニメの主人公みたく、名乗りと掛け声を残して、彼は自室へと姿を消した。

さて、次は自分の番だな。

あ…、そう言えば一夏はノックをしていなかったけど大丈夫だろうか？まさか入った瞬間にルームメイトの着替え中とか、そんなライトノベルのようなことはないだろうな、と一人自分を納得させながら、一応ノックしてみる。…ちなみに2回がトイレ、普通のノックは4回がマナーらしい。

「…どうぞ。鍵は開いてるから…」

静かながらも、通った声が中からする。一応許可は貰ったのだ。

（よし、ロン、行きまーす！）

自身も一夏と同じような喝入れをして意を決し、ガチャリと扉を開け放つ。

ぶっちゃけ、暗かった。

夕方から夜へと変わりゆく時間帯ではあるものの、それを差し引いても暗い。

ぼんやりと光っているのは、恐らく端末を操作しているのだろう。…明らかに目が悪くなる行為だ。

「…その…暗くないのか？」
「……？パソコンの画面の明かりがあるから問題ない…。…それよりも…」
パソコンの画面を眼鏡に映しながら、横目でロンを一瞥する。暗がりの中なのでわかりづらいが、水色の内巻き髪に見える。そして自身を見る目は、まるで観察していた。それはそうだろう。本来いるはずのない男がＩＳ学園にいる。それに対して思うところがある人間ばかりなのだから。
「貴方は…織斑一夏と違う方の男子操縦者？」
「あぁ。ロン・ラーワンダーだ。その…君と同室と言うことになる。よろしく、お願いします。」
なぜが自身が年上なのだが、最後は敬語になってしまった。そりゃまあ、現在進行形で『眼を細めてジト目』で見られたら、そうもなろう。
「…そう。私は更識簪。よろしく。」
「よ、よろしく頼む、ミス更識。」
ジロリ。
あれ？名前を呼んだだけで睨まれた？
「簪。」
「え？」

「簪って、呼んで。この学園にはお姉ちゃんもいるの。だから簪って呼んで欲しい。あとミスも要らない。」
普通なら初対面の相手に名前で呼ばれるのは嫌がるだろうに、そうまでフランクに接して良いものか？だが…
「わかったよ、簪。俺のこともロンと呼んでくれ。…これで良いかな？」
「ん…。」
納得いったのか、少し、ほんの少しだが頬笑んだ気がする。
本人たっての希望だ。それなら遠慮は要らないか。
「とりあえず…中に入ったら？荷物、届いてるし、入口に立ってると目立つよ？」
「それもそうだ。…一応電気をつけても良いか？流石に荷解きするのにディスプレイの明かりでは暗い。」
「いいよ。」
パチリと入口の壁に備えられたスイッチを入れると、暗い部屋になれた目にＬＥＤの眩い光が刺激し、思わず眼を細めてしまう。
「ん、眩し…。」
「俺ですらここまで眩しいと感じるんだから…簪はもっと眩しいだろうな。」
「…少し、集中しすぎたかも。」

「暗い中での作業は目によくないぞ？昔から言うだろう？画面を見るときは部屋を明るくして離れてみろって。」
「確かに、そうだけど…。」
と、ここに来てパソコン、そのディスプレイに映されている物にようやく目が入る。
起動実験の時と座学で、ある程度その造形を目にはしているため、それが何なのかを理解するには余り時間はかからなかった。
「これって…ＩＳ？」
「えっ？わわっ！」
見られたと知るや否や、そのディスプレイを小さな身体で必死に隠す。
見た所、日本製第二世代型ＩＳの『打鉄』に似ているが、纏っていると想定した画像を見るに、装甲面積がかなり小さくなっているように感じた。特に上半身はほぼＩＳスーツのみで、両手の腕部装甲は無い。防御に重きを置いた打鉄と打って変わり、高機動タイプに見えなくもない。
「新しい…ＩＳ？」
「み、見た…？」
見てはいけなかったのか、顔を赤らめてじっと見てくる簪氏。
さて、どうしたものか。

×，いや、見てない。
○，少し、見えた。
□，青と白のストライプ（橙色）
△，ロマンス（赤字）
↓○

「ごめん、少し見えたんだ。…その、秘密だったりした？」
「…別に…いい。見た所で…どうなるわけでも無いし。」
簪がディスプレイを明け渡すことで、その全容をハッキリと見ることが出来た。
『打鉄弐式』
そう書かれている。
が、
「ウチガネ…何と…呼べば良いんだ…？」
「打鉄ニシキ。」
「打鉄錦？」
「それ、グルンガストネタ。弐式というのは、英語で言い換えると、ＭａｒｋⅡみたいなモノ。」
「なるほど…打鉄の改良タイプというわけか。でもこれは設計段階みたいだけど…？」

「私が…作ってる。」
「ＩＳを…君が？」
「信じられない？」
「いや、信じるも何も…凄いことだと素直に思える。」
「…そう、ありがとう。」
　ＩＳと傍目に見るには簡単だが、そのコアと言い、かなりのテクノロジーの塊だ。コアはともかくとして、その外装を作るにしても、それ相応の技術と知識、そして資材が必要不可欠。実機を見て十分それを理解できてしまったロンは、ＩＳを作り上げようと意気込む簪を素直に賞賛できた。
「…と、そうこうしているうちに夕食の時間だな。俺は食堂に行くが、簪はどうする？」
「…もうそんな時間なんだ。…そうだね。気分転換もかねて…」
「じゃ、行くとしようか。」
　そうして部屋を出た二人だったが、よもやこのあとにあんな展開が起こるなどと、露とも知らなかったとロンは言う。

第６話『始まるクラス代表決定戦』

ロンと簪が廊下に出た瞬間
何かが砕けるような音と共に、男の叫び声が廊下に木霊した。
そして目の前には廊下の壁に背を預けてへたれ込んでいる一夏。そして１０２５室の扉から突き出している木の棒…否、木刀。
廊下に出たロンと、そして簪はその光景に唖然としてしまった。
「…何やってるんだ一夏。」
「ロ、ロン！助けてくれぇ！」
もはや泣き入りそうな声でロンに縋り付く一夏。状況が読めないロンと簪は疑問に思い、揃って首を傾げる。
「とりあえず事情説明をしてくれないか？じゃないと、こうなった理由が飲み込めないんだけど。」
「あ、あぁ。実は…」
かくかくしかじか
かくかくうまうま

「なるほど、意気揚々と入室したは良いが、シャワーを浴びて出て来たバスタオル１枚の篠ノ乃箒と鉢合わせて、木刀によるその報復をかわして今に至る、と。」
「な、何で今ので分かるの？」
「とにかくロン！箒を説得してくれないか？アイツ、激おこ状態でさ、俺の言葉を聞かねぇんだよ。」
　…確かに、いくら半裸を見られたとは言えど、その怒りで木刀で扉を貫くほどの腕だ。そんな物で殴打されれば、下手をすれば死んでしまうかも知れない。となれば、渦中の人物である一夏をけしかけるよりも、第三者による介入の方が冷静な判断を持たせられるだろう。
「…仕方ない。乗りかかった船だ。」
　ここで放っておいても寝覚めが悪いのも確かだ。
　そんな想いと溜息を吐き出して、ロンは意を決する。
「篠ノ乃箒。」
「な、なんだ？その声は…ロンか？」
「まぁ一夏の声でなければ俺しかいないだろう？…兎にも角にも、二人の問題だけならともかく、皆何事かと集まってきているぞ？」
　これだけ大声で叫んでいれば、遠くの部屋ならばともかく近場の部屋ならば、否が応

でも耳に入るだろう。そうなれば、野次馬根性丸出しで好奇心旺盛である女子生徒は、まるで砂糖に群がる蟻の如く、わらわらと集まってくる。

「何々？何が起こってるの？」

「なんでも、一夏君とロン君の中に嫉妬した篠ノ乃さんが激おこぷんぷん丸で、『一夏を殺して私も死ぬ！』状態らしいよ？」

「何その修羅場。」

素晴らしきかな女子の妄想力、そして謎の捏造力。

「ほ、箒ィ！このままじゃ、俺とロンの掛け算的な何かの本が世に出回っちまう！後生だから部屋に入れてくれえ！」

「一夏とロンの…掛け算…」

ぽわわん…

そんな効果音が一夏と箒の部屋の中から聞こえてくる。

嫌な予感がする…

「くばはっ!?」

訳のわからない声と共に、ドサリと部屋の中で倒れる音がする。何事かと皆が静観していると、ドアと床の隙間から、赤い液体が流れ出てきた。そして漂うのは…鉄の香り。

「箒!?箒ィ!?!」

「ふ…ふふ…一夏ァ…！一向に構わんぞォ…！お前が攻めでも…受けでも……！」
「…ダメ、既に彼女は腐ってる…遅すぎたんだ。」
冷酷なまでに簪が下す箒の病状は、一夏を糸色望させるには充分だった。
「…状況はわからんが…ほっといても良いのか？」
「多分、興奮して鼻血が出ただけだと思うし。放っといても問題ないと思う。」
「そうか…一夏。とりあえず夕食に行こう。篠ノ乃箒に関しては…時間が経てば復活するだろう。」
「…そう、だな。」
未だ流れ広がる赤々とした液体を横目に、３人は野次馬の中を突っ切って食堂へ向かった。

「いや、すまないな。なぜかいきなり鼻血が大量に出てしまってな。少し貧血気味で倒れていたみたいなんだ。」
食堂で注文したメニューの出来上がりを受け取った辺りで、鼻に大量のティッシュを

詰めた箒が合流した。その顔色は、何処か血色が余りよくない。やはり大量の鼻血が原因だろう。
「それはそうと…なぜ私は気を失ったのだ?その理由がさっぱりなんだが…。」
「世の中には覚えていない方が幸せなこともあると思う…。それだけ。」
少し多めに盛られたかき揚げうどんを、可愛らしくつるつるとすすりながら、簪は箒に釘を刺す。
人は時として、肉体や精神に強い負担がかかった出来事を封印し、再発防止を促すことがあると言うが、箒の記憶のすっ飛び具合はまさにそれだろう。
「その…まぁ大事がなくてよかったよ箒。せっかくまた同じクラスで勉強出来るんだ。仲良くしようぜ。」
「そう、だな。うむ。そうするとしよう。」
そう言うと、箒は鯖味噌定食のメインの身を解し、口に運ぶ。
ちなみに後の2人、男子たる一夏とロンは、それぞれ唐揚げ定食と、ハンバーガーセットだ。
「そう言えば今更なんだが、ロンの隣の子って、ルームメイトか?」
「本当に今更だな。」
「なんだよ、箒だって今まで話題に出さなかっただろう?」

「それはそう、だが…」
「とりあえず紹介だけしておくか。彼女は更識簪。俺のルームメイトだ。」
「…よろしく。織斑一夏君と…篠ノ乃箒さん…だっけ？」
「俺のことは一夏って呼んでくれ。先生に千冬姉が居るからな。」
「私も箒でたのむ。」
「じゃあ…私も簪でお願い。上級生に…お姉ちゃんが居るから。」
「あぁ、宜しく頼むぜ、簪さん。」
「呼び捨てで良い。同い年なんだし、畏まられるのも、さん付けされるのも、何だかむず痒い。」
「お、おう。」
　そのあとは…まぁ談笑しながら夕食をゆっくり平らげた訳だが、その途中でふと、簪がとある話題に手を出す。
「そう言えば…イギリスの代表候補生と決闘するって話を聞いたけど、本当なの？」
「あぁ。本当だぜ。」
「全く、昔からお前は頭に血が上りやすい質だったが、それは変わらんのだな。」
「だってさ、日本の文化が後進的だとかそんなことを言われて腹が立たねぇ訳ないだろ？俺を猿だとか言うのはともかくさ。」

「…日本の文化が…後進的…？」

セシリア氏の発言を話していると、ふと簪氏の眼鏡がギラリと光る。静かに、そして怒気を孕んだ声で呟いた。

「日本の特撮や…アニメ、ゲーム技術を…後進的と…、そう…。ふ、フフフ…ハハハ…！」

空気が、震えた気がした。それは、互いに気迫をぶつけ合う剣道を学んだ一夏や箒でさえも悪寒を覚えるほどのおぞましき物。食堂で夕食を食べていた生徒も、何事かとその箸を止めて四人の席に目を向ける。

「一夏…ロン…。」

「は、はいぃ!!」

思わず姿勢を正して畏まった返事をしてしまった二人。簪の気にでも当てられたのか、じわりじわりと嫌な汗が分泌されていく。

「クラス代表戦では敵だけど…クラス代表決定戦に勝つために…特訓するよ。」

「はいぃ!!」

有無は言わせぬ、是非も無し、と言葉に含まれた威圧感。もはや二人に拒否権は無い。

「ま、待ってくれ簪。」

と、そこに異議を唱えるのは、一夏と隣り合って座っていた箒。簪の気で若干声が震えているが、それでも今の簪に異を唱えるのにどれ程の胆力と勇気が要るか、それは想

像を絶するだろう。
「す、済まないが、一夏の指導は…私にさせてはくれないか？」
「一夏の…？」
「う、うむ。私と一夏は幼馴染みだ。互いのことはある程度知り得ているし、気心の知れる人間が教えた方が捗ると思ったのだが…。」
「……。」
「ダメ、だろうか？」
箒としては、ほのかな恋心を寄せている一夏と長年離れ離れになって、何の因果か天災による陰謀か、このＩＳ学園でようやく再会。同じ学舎で学ぶことが出来るようになった。それだけに今までの時間を埋めたいのだろう。唯でさえ、鈍ちんで、鈍感で、唐変木で、朴念仁で、アンポンタンな一夏だ。少しでもアタックチャンスを増やさねば、振り向かせるなど夢のまた夢だ。
「良いと思う。」
「そ、そうか！」
「うん。今思えば、私一人で二人も見れるほど器用じゃないし。一夏のこと、箒に任せてもいい？」
「あぁ！任せてくれ！」

「…なんか、俺の意志と関係無しにこれからのことが決まっていってるんだけど…。」
「何か異論でも?」
「な、何でも無いです。」
「そう言えば、簪は…」
「四組。だから本来敵だけど、イギリス代表候補生打倒には手を貸す…。日本のカルチャーを馬鹿にした英国女に、カルチャーショックを与えてやるの。ヤック・デカルチャーって。」
簪の中では既にイギリスは、歌などの文化を知らない、戦闘民族国家となっているようである。
聞けばセシリアと同じく、日本の代表候補生である簪に教えを請えるならば、ロンにとって此程頼もしい相手は居ない。
「やるからには勝つよ…!いい!?」
「い、イエスマム!」
ともあれ、やる気に満ちあふれた女子によって、男子生徒二人には過酷な1週間が幕を開けたのであった。

そして、なんやかんやで１週間が過ぎた。
途中、なんやかんやがなんやかんやで、なんやかんやが済んで決闘当日。
件の二人と、それぞれ同室のルームメイト、そして一組担任と副担任が、ピットに集まっていた。
「なぁ箒。」
「なんだ？」
「俺、ＩＳで模擬戦だって言ったよな？」
「うむ。」
「なのにこの１週間、ＩＳのアの字も触ってないんだけど？」
「……。」
「視線逸らすな視線。」
「いや…一応アリーナの使用許可と、ＩＳの貸し出し申請はしたのだ。」
箒曰く。
訓練機の貸出は、数が絶対的に少なく、それに比べると申請する生徒の数は多く。打鉄もラファールも、１週間は予約が一杯だったのだ。どこもかしこも、授業以外でＩＳ

に触れたかったり、訓練をしたかったりする。それだけに、アリーナはともかく、訓練機の貸出は入学式より先に申請していた上級生が優先させられてしまい、結局借りれずに居た。そしてそれは彼だけに限られた話ではない。

「ごめん、ロン。実機を使った訓練が出来なかった。」

「いや、その代わりに論理的な操作法を簪から教わることが出来たから、後は感覚の問題だ。あとは慣れだと思うし、気にしなくても良い。」

ロンも同じ理由で借りることが出来なかった。それをフォローするために、簪による座学で知識面の補填を行った。

一夏は箒との剣道で感覚を

ロンは簪からの知識を

それぞれ培った。あとは実際にＩＳへの搭乗する事でしか出来ないことばかりだろう。

そんな中、一夏に用意されるというＩＳが、未だ届かないことが問題になり、真耶と千冬が、片や電話を掛け、片や苛立ちが表に出て来ている。

「もうすぐ予定時刻だというのに…！」

「向こうも、ＩＳは既に出たと言っています。…この場合…ラーワンダー君が先に戦って貰うしかないかも知れません。」

「…了解です。」
「では…予めお前が希望していたラファールを…」
深緑のデフォルトカラーに染められたラファールが台車に乗せられて鎮座する。
相手は第三世代の専用機。
対してこちらは訓練用第二世代機。
到底勝ち目がない戦いだが、そうも言ってられない。
そう考え、彼の機に触れようとした瞬間、
「すいません、白兎宅急便です～。」
何とピットに、小包を抱えた宅配業者が入ってきたのだ。白と黒のボーダーのシャツに、真っ白の帽子。おあつらえ向きに、白いウサギのアップリケをしている。
「なんだ?ここは関係者以外、立ち入り禁止だぞ?」
「えっと。ロン・ラーワンダーさん宛てに速達の小包を預かっているんです。受付で伺ったところ、こちらに案内されましたので。」
「俺に、ですか?」
「はい。よろしければ、こちらにサインを…」
「…仕方ない。こちらも急いでいる。ラーワンダー。早いところサインをしてやれ。」
「…了解です。」

業者にペンを受け取ると、受け取り印の欄に、自身の苗字を書き入れる。それを確認した業者は、ニコリと営業スマイルを浮かべ、小包をロンに手渡した。
「確かにお届けしました。…そうそう、差出人から手紙をお預かりしていますので、こちらも合わせてお読み下さい。」
白の封筒にピンクのハートマークの便箋を渡すと、一礼してピットを後にする。残されたのは、小包を抱えて手紙を見つめるロンと、他五人。ハートマークの便箋ともなれば、如何に恋心に疎い一夏と言えど、その中身に大体の想像がついてしまう。
「ろ、ロン。もしかして、故郷に大切な人でも?」
「…だからといってこんな物を送ってくる間柄の人は居ないけどな。」
「時間が惜しい。ラーワンダー、早く開けろ。アリーナ使用時間は限られている。」
「了解です。」
丁寧に便箋を開き、綺麗に折りたたまれた手紙を広げていく。その中身が露わになっていくにつれ、皆の眼光が強くなってきている。恋愛に無関心に見える千冬ですら、横目でチラチラと手紙の中身を覗き見ようとしているほどだ。
「えっと…」
『小包の中身の取り扱い方』
「「「「「……。」」」」」

期待していた内容とは全くかけ離れた物に、一同絶句する。もっと何かこう…青春の甘酸っぱいイベント的な物を期待していただけに、その落胆振りは顕著な物だった。
「なんか…期待はずれかも…」
「と、とにかく、小包を開けてみてはどうだ？手紙の中身はそれに関してのことだろう？」
「そ、そうだな。」
一応、皆より年上ではあるが、ロンとてラブレター的な物を期待していないと言えば嘘になる。だが、現に思わせぶりな内容ではあれど、自分への小包の中身が気にならないと言うのも嘘になる。
段ボールに梱包されたそれを床に置いて、丁寧に開いていく。
そして…中から出て来たもの。それは…
「…なんぞこれ？」
「…腕輪…にしては、変な画面が付いていますね？」
深緑のラファールと同じような色のそれに、一同全員がのぞき込む。
「えっと…『腕時計と同じ感じで左手に着用。』？」
緩衝材代わりのプチプチを外して、それを左手に着用する。ゴツイ見た目通りのズシッとくる重さが左腕に掛かってくる。

「これは…なかなか重いな。」
「次は…『自動で電源が入るので、待つべし。』だそうです。」
拾い上げた手紙を真耶が読んでいく。
その後には、真っ黒だった画面に、緑色のレトロ感漂うキャラクターが写し出される。
「…えらく古臭い物なのだな。…一体誰から…」
緩衝材として役目を終えたプチプチを潰しながら、箒は真耶の持つ手紙をのぞき込む。
その中身は…
『誰から差し出されたかは秘密だぜぃ☆箒ちゃん☆』
読んだ瞬間、パサリとプチプチを落としてしまう箒、そして真耶から手紙を取り上げて目を通す千冬。
「ま、まさかこれの差出人て…!」
「ラーワンダー!今すぐそれを外せ!」
だが時は既に遅く。
画面には
『パーソナルデータ、登録完了。コネクター接続。』
そう表示されていた。

「くそ！アイツめ…！やってくれたな…！」
「ろ、ロン！大丈夫か？何ともないか!?」
千冬はぐしゃりと握り潰した手紙を床にたたきつけると、それを踏み潰した。
箒はと言えば、何か事情を知るのか、ロンの身体を心配し、付けられた腕輪と、そして彼の顔色を観察する。
「いや…何ともない。…一瞬チクリとしたくらいで、あとは何も…」
「…そうか。…なら良いが…。」
「なぁ千冬姉。これの差出人て…」
「あぁ。察しの通り、あの馬鹿からだ。」
音沙汰無い友人から、自身の教え子に贈られてきたわけもわからない腕輪。それを説明書通りに装着してしまい、彼女の企みのままになってしまったことに千冬は舌を打つ。だがこれが何なのかはともかく、異常が無いのならばラファールを装着して模擬戦を…

出来ればどれだけよかったか。

次は、付けられた腕輪から、眩いまでの光が発せられる。
それにはロンはもちろん、一夏や簪、箒や真耶、挙げ句千冬までもが目を覆い、その光を遮る。
「な、なんだこれは…!?」
「何も見えませ～ん！」
「私の目が…目がぁ…！」
「スゲぇな簪、こんな時にまでネタを仕込めるって…！」
「感心している場合か!?」
三者三様、否、五者五様の反応を見せる中、1番逐一冷静なのはロンだった。自身の腕に取り付けられたそれから溢れ出る光に微動だにせず、ただただ眼を細めてそれを見つめるだけ。肝が据わっている、と言えばそれまでだが、それだけでも充分すぎるほどだ。
「これ…は……！」
光が溢れる中、彼が見たのは、量子化された鋼鉄の鎧が目の前にその姿を現す光景だった。
やがて…
光が収まると共に、眩んだ眼が少しずつ元に戻っていく。

「…ふぅ…一体何だったんだ？」
「まだ眼がチカチカする…。」
網膜が焼かれたかのように一時的に視野が乱れるが、それもすぐに収まった。一体何事かと、皆が整理する中、ロンは一歩踏み出す。
そこにあるのは、黒金の鎧。
しかし、ＩＳのようにシャープなデザインとはかけ離れたもの。
躯体の所々から伸びるパイプ。
頭部にはヘッドライト。
背後のバルブハンドル。
次世代の兵器…と言うよりも、一昔前のテクノロジーで造られた物にも見える。
「…現代よりも前のロストテクノロジーによる兵器…！これが…ガンダム・フレ…」
「いや、どう見ても違うだろ。」
「これは…ＩＳ、なのか？」
ロンの呟きに応じるかのように、ゴーグルに当たる部位に光が走る。意志でもあるのか、と言わんばかりに、恐らく背面に当たる部分。密封した空気を吐き出すかのように、プシュゥ…と装甲を展開する。
「乗り込め…と言うことなのか？」

「…どうやらその様だ。…ラーワンダー。あの馬鹿の作品だから…信用に値するかは分からん。だがお前はこのままこの機体でオルコットとやり合うか、それともラファールでか、好きな方を選べ。その選択に、私は一存しよう。」
「お、織斑先生!?そんな…得体の知れない機体を選択肢に入れるのは…!」
「分かっている。だが、あの馬鹿が何の考えもなく赤の他人にＩＳを…機体を作るとも思えん。ならばそれに賭けるのも１つの選択だろう。そしてそれはラーワンダーに委ねる。」
「俺は…」
目の前のソレを見やる。
先程のゴーグルの光以来、何も動かない。
だがロンは何かを感じる。
この機体から…。
何と表現すれば良いかは分からない。
しかし、因縁にも似た何かを、ソレを感じるのは確かだ。
「俺は……!」
意を決し、歩んだ。背を開いたそれに身を投じ、フィット。
『搭乗者、確認。ハイパーセンサー、リンク。ＰＩＣ（パッシブイナーシャルキャンセラー）アクティブ。シールドエ

ネルギー、問題なし。フィッティングスタート。』
機械音声と共に、ロンは体に違和感を感じる。
自身の身体が…意識が、この黒金の鎧に馴染んでいく。
否
１つとなるような感覚。
試しに右手の平を、いつもの感覚で開いて閉じるようにしてみる。すると、鎧の手の平も同じように動くではないか。
『成る程、ハイパーセンサーの感覚は慣れないけど、こう言った動作ならやりやすいな。』
端から見ればフルスキンだ。全身すっぽりと覆ったそれは、ＩＳと呼ぶべきか否か悩み所だ。だが不思議と、コイツならやれる。そう思える。
『ＰＩＰ－ＢＯＹコネクト。ＶＡＴＳアシスト可能。』
だがここに来て、簪からの座学になかったはずの言葉が飛び出す。
ＰＩＰ－ＢＯＹ？
ＶＡＴＳ？
「ラーワンダー。問題なければカタパルトに接続し出撃しろ。…大分時間を食ったからな。巻いていくぞ。」
『…了解。』

未だ頭の整理が追い付かないが、今はカタパルトから飛びだした先にいるセシリアとの戦いに赴く方が先だ。さっきの単語…システムについては、戦いの中で学ぶしかない。

機体射出用のカタパルトに接続すると同時に、眼前に信号機のような物がスライドして降りてくる。そしてそれは…カタパルト射出のカウントダウンを示すものだと容易に想像できた。

「頑張れよ！ロン！あいつに一泡吹かせてやろうぜ！」

「全力を尽くせよ。」

「ロン、頑張ってね。」

『…おう！』

友人達が、エールを送ってくれる。此程頼もしい物はあるだろうか？

未知のシステムによる不安が掛かっていた心中も、幾分か晴れやかになる。

信じてくれる一夏や箒。

知識を教えてくれた簪。

皆のためにも…

（無様を晒すわけには…行かない！）

『ロン・ラーワンダー君！発進どうぞ！』

『ロン・ラーワンダー！行きます!!』

拘束射出により、身体が後ろへ押しやられる感覚に耐えながら、ロンは飛翔、跳躍した。

１年１組クラス代表決定戦
ロン・ラーワンダー
ＶＳ
セシリア・オルコット

第７話『蒼き雫ＶＳバケツ頭』

カタパルトから射出され、飛び出して見えたのは雲一つ無い青々とした空。
突き抜けんばかりに澄んだそれは、数年間見ることの無かったもの。改めて見てただ一言思う。
『Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ（キレイだ）…』
と。
だが何時までも感傷に浸るわけにはいかない。簪に教えて貰ったＰＩＣの操作方法を思い出し、イメージする。
（確か…宙に浮くイメージで…！）
想像力によって慣性を無視して浮かぶＩＳのテクノロジーというのは、ロンにとって常軌を逸したものだ。だがそれが事実として確立しているだけに、簪に教わったままに浮遊をイメージし、その座標に留まるように思い描く。
しかし、
『浮かないんですけど…』
いくらイメージしようが、落下スピードを落とすどころか、重力に従ってどんどん下

降していく。
その軌跡は、カタパルトから見事な放物線を描く。そして…
大規模な振動、そして衝撃波を穿ち、アリーナ中央付近に着地するに至った。
『…床にヒビが入ってしまったな。これは後で反省文かも知れない。』
着地の衝撃からか、特殊合金で作られているはずのアリーナの床に、小さな蜘蛛の巣の如くヒビが入っている。訓練する上でＩＳが操作ミスにより、落下、そして墜落する事はままあるが、それによって壊れる度合いが高いのはどちらかと言えばＩＳであり、床には掠り傷程度しか付かない。それでもただ着地しただけでヒビが入るなど前代未聞だ。
『あら？逃げずに来ましたのね？』
見上げれば、先程見た青空よりも更に鮮明な蒼を纏ったセシリアが浮いていた。右手に持った長身の銃。背後に浮かんだ一対のアンロックユニット。
成る程、簪から見せて貰った公開映像にあったその姿と瓜二つだ。
ブルー・ティアーズ（蒼雫）
イギリスが開発した第三世代ＩＳ。
『見ましたところ、訓練機ではなく専用機のようですが…フフフッ！ＰＩＣを作動できずに地を這うしか出来ない欠陥品のＩＳを扱う事になるなどと、Ｖａｕｌｔ出身の貴方

にはうってつけの機体ですわね。』
『どうだろうな？余り初見の相手を甘く見ない方が身のためだ。』
『そうかしら？見るからに古臭い物を纏っている地点で、結果は見えていますわ。』
『やってみなければわからない。…と、御託はそろそろお終いにしよう。…あんまり相手を下に見ていては、後が悲惨なのはそちらだからな。』
『……どういうことですの？』
明らかに挑発的な口調のロンに、セシリアは苛立ちを隠そうともせず、問いただす。
普段から男を下に見ているだけに、男からの挑発が顕著に鼻につくらしい。
『お前が負けたとき、あれ程蔑んでいた奴に負けたともなれば、世間の評価は地に落ちるだろうからな。』
『そう…ですか……！』
ハイパーセンサーによってセシリアの顔が鮮明に見えるが、その口元はピクピクと引き攣っている。
どうやら…余程お気に召さないらしい。
そうしている間に、試合開始のカウントダウンが迫る。
3！
2！

１！

『では、モグラさんには無様に地に這いつくばって頂きますわ!!』

カウントが０になると同時に、蒼き長身の銃『スターライトＭｋ―Ⅱ』から穿たれた閃光。

ブルー・ティアーズの兵装は、特殊兵装を含め、メインアーム共にレーザー兵器だ。その弾速は実弾と比べるべくもなく速く、見てからの回避という物は難しい。それだけに、放たれたレーザーの奔流は、ロンのＩＳの頭部に吸い込まれた。

シールドエネルギーへのダメージによる衝撃で、グラリとよろめいたロンは、後方へ大きな物音と共に倒れ伏してしまった。

『あらあら?一撃で終わってしまいましたか?まぁ、所詮この程度ですわね?そもそも男、ましてや地下で暮らすモグラさんなどが、この私に適う道理もあるはずありませんもの。さて…、お次は織斑さんですわね?連戦で構いませんわ。早く…』

『…案外、シールドエネルギーが発動しても、衝撃は来るんだな…。』

ボソリと、オープンチャンネルで響いた声は、セシリアにとって信じられない物だった。

確かにヘッドショットを決めた。その衝撃で倒れ伏したことで、気絶したはずなのだ。にもかかわらず、平然と、ゆっくりと立ち上がってくる。

『な…な…なんで…確かに頭を撃ち抜きましたのに…？』
『どうやら致命傷を与えたと思ってるみたいだが…、生憎だったな。確認してみたらどうだ？』
『え……？』
セシリアが必要ないと思っていたＩＳによる相手のバイタルデータの表示機能。それの表示をオンにする。こうすることによって相手のデータをある程度把握することが出来る。そしてそれは、敵ＩＳのシールドエネルギー残量も表示させることが出来るものだ。
そして…
そこに表示されたものは…
【Ｓ（シールドエネルギー）Ｅ　６８９／７００】
『な…ぁ…!?』
ベッドショットをキメたにもかかわらず、その減少量が極々僅かと言うものだった。シールドエネルギーと言う物は、急所を重点的に防衛するように張られているため、逆に言えばそこを責めることでシールドエネルギーを大幅に削り取ることが出来るはず。にもかかわらず、ヘッドスナイプの効果という物がそこまで無い現状に、セシリアは言葉を失ってしまう。

『唖然としている暇は、あるのか？』
　ハッとして上昇した矢先、先程まで駐留していた空域に赤い一筋の閃光が走った。ハイパーセンサーが感じた熱量。それはセシリアがよく知る兵器であり、そして使用する種類の物。
『れ、レーザー兵器…？』
『…外したか。』
　正面から見れば、四角柱のような形。そしてそれにトリガーや露出したエネルギーケーブル。そして中央部にカートリッジ式のエナジーセル…。
　スターライトＭｋ―Ⅱと同じくするレーザーによる光学兵器だ。
『な、生意気ですわ！モグラが私とおなじレーザー兵器を使用するなど…！』
『実際、使用権限がそちらに有るわけでは無いだろう？』
『お黙りなさい！』
　再び放たれたセシリアのレーザー。しかしそれは、特殊合金の床を焦がすに至るにとどまった。
　狙った場所に、ロンが居ないのだ。放たれた閃光が届くよりも先に、セシリアの視界から消え去った彼を、ハイパーセンサーを駆使して探し出す。
『どこ…どこですの…!?』

『何処を見ている?』

オープンチャンネルによる音声なので、どちらから放たれた声かもわからない。しかし、ブルーティアーズのセンサーが告げる警告が、セシリアの身体を突き動かす。

『真下…!?』

後方に下がると、眼前に赤いレーザーが通過する。間一髪、コンマ一秒も遅れていたら直撃は免れなかった。

『まだだ!』

『くっ!』

姿を探す内に、2発目、3発目と、赤いレーザーの応酬がセシリアを襲う。しかし、不意を突かれた攻撃に対して対処できる辺り、流石は代表候補生と言ったところだろう。

『見つけましたわ!』

ハイパーセンサーが捉えた先、ロンの姿が目に入る。

しかしそこに映っていたのは、あの鈍重な見た目のアーマー、その動きとは思え無い物だった。

アリーナの床を、まるで滑るかのように軽やかに、そして滑らかに駆ける金属の鎧。それはまさしく異型と呼ぶに相応しい。

アリーナの床に黒い跡を残しながら走るそれは、脚部にローラーでも仕込んでいるの

だろう。
『な、ぁ!?』
『気を逸らしすぎだぞ。』
弾ける音と共に、セシリアの肩にレーザーがとうとう直撃した。
『この…っ!』
よもや当てられるとも思いもせず、むしろノーダメージで終わらせるつもりだったセシリアにとって、それを覆された屈辱は計り知れぬ物。その顔に怒りを浮かべて、地を滑走するロン、そのパワーアーマーを見やる。
『一撃まぐれ当たりを入れた程度で、図に乗らないことですわね!』
怒りの中にも未だ冷静さを残すのは、やはり国家代表候補生に選ばれる所以でもあるだろうし、スナイパーとしての本能が冷静で居させるのか。次々と撃ち出される朱の閃光を躱していく。
『やはり一筋縄ではいかないな。』
『貴方如きに特殊兵装を使うは憚られましたが、これ以上は私のプライドが許しません!』
左手を並行に振るうと同時に、バックパックから蒼の遠隔操作兵器が分離する。
（なるほど…これが…）

機体名を冠する特殊兵装、この機体が蒼き雫であるが所以のその兵装。イメージインターフェイスを使用した第三世代兵器。

『さあ！無様に踊りなさい！私とブルーティアーズが奏でる円舞（ワルツ）で!!』

『生憎と、ダンスは不得手でな！お断りさせて貰う！』

カチリと、レーザーライフルの銃身に設けられた切り替えのスイッチを操作する。無論、セシリアがそれを見逃すはずもないが、完全にロンを舐めてかかっている彼女がそれを特に気に留める事もなく、ブルーティアーズの操作に集中する。

（今さら何をしようとも、私がブルーティアーズを使い始めたからにはお終いですわ！）

しかし、この判断が後に…彼女にとっては誤算でしかないことに気付かされることとなる。

空気を焼く音が聞こえた。

それは今までロンが撃ってきたレーザーライフルの発射音には違いない。セシリアはブルーティアーズの操作に集中しており、それをハイパーセンサー越しに見ていたのだ。無論、射出した四機のブルーティアーズは、彼を取り囲むと、レーザーによる雨を降らせてはいた。それは確実にパワーアーマーに当たっては居たし、少しずつながらもシールドエネルギーを削ってもいた。初見で、しかも初心者ならば、ブルーティアーズ

の動きに翻弄され、戸惑っている内にレーザーで蜂の巣にされて、そのままエネルギーを削りきれるだろう。そして、レーザーライフルを撃たれる瞬間に回避へと移すことは容易。ハイパーセンサーで捉えた、向けられる銃口の先から、身体一つ分躱せば良いだけ。これはＩＳの操縦に慣れているセシリアだからこそできる芸当。

しかし…

『な…なんで…？』

セシリアは眼を丸くする。

躱したはずの赤い閃光、それが自身に命中していた。

しかもそれが２発も。

その証拠に、左脚部と左腕部共に、レーザーライフルによって焼かれた証として、直径３㎝ほどの溶解跡が煙を上げていたのだから。

『…なにも直射だけが芸当じゃなかったらしいな。』

再びトリガーを引き込む。それに反応し、セシリアも今度は身体一つと言わずにバーニアを噴かせて、全力で回避する。そして、先程まで彼女が居た空域には、三条のレーザーが貫いた。

『単射から…三発同時に!?』

『そうらしいな、さしずめ散弾銃とも言える。』

しかも連射性は、単射の時とそう変わらずに連発してくるものだから厄介。セシリアも思わず冷や汗が流れる。

どうする…？

スターライトによる射撃による効果は薄い。更にビットから撃ち出されるレーザーは、スターライトよりも出力は低いから、それよりも効果が薄い。

残されたセシリアの手札は二枚。

だが一つは緊急用、もう一つは意表を突く為に今は出すべきではない。

どうする…？

レーザーが余り効かず、強引に先程のレーザーライフルを撃ちまくられるならば、ゴリ押しで負けてしまう。

しかし、回避に専念していたら、ビットは棒立ちならぬ、棒浮き状態。それを撃破されては手数の低下によってより不利な状況に陥るだろう。

ならば…

『戻りなさいティアーズ！』

自律操作に切り替えると、ビット達は一斉に親鳥の元へと飛んでいく。撃破されるくらいなら、手元に置いておく方が良い。

これで回避に専念できる。

ビットが無事に戻って安堵の息を漏らした、その瞬間。
ハイパーセンサーからの警報で、再びバーニアを噴かせて回避に移る。
飛んできたのは…、
『…コーラの…空き瓶…!?』
三度鳴る警報で軌道変更、その眼前には…深緑の肌をした、デフォルメされてはいるが、厳つい顔をした人形が宙を舞っていた。
『!?』
『因みにこれは、君の部屋にあったものらしい。』
『な…ぁ!?わ、私のフォークス!?あ、あ、貴方!?いつの間に!?というか、何ですのそれは!?』
『なに?って言われてもな。量子化格納されていたから、使い方を見て撃っただけだが。』
とまぁ、次から次へと飛び出すのは。
ゴミ
ゴミ
ゴミのオンパレード。
ゴミを弾丸にし撃ち出す、と言う行為が斬新なのか、それとも奇抜すぎるのか、しか

しセシリアの意表を突くには十分すぎるほどだ。そしてそれは、観戦する生徒にも同様らしく、ロンがセシリア相手に善戦して、湧いていたアリーナも、唖然とした空気に包まれていた。

なぜかそのゴミともいえる弾丸が格納されていたのか、そしてなぜその中にセシリア愛用の？フォークス人形があったのかは謎だが、ありとあらゆるゴミがセシリアめがけて撃ち出される。

『も、もう許しませんわ！フォークスのかたあぶっっ!?』

足を止めたのが運の尽き、セシリアの顔面に、機械で出来た犬の玩具の足の部品が直撃し、変な悲鳴が上がる。

大きく仰け反った頭を戻した先に飛んできた次のゴミは…

ゴンッ!!!

という、鈍い音と共にセシリアの顔面へボーリング玉が直撃した。

勿論、シールドエネルギーがあるので、本来の顔面崩壊な血塗れにはならないが、衝撃までは殺せずに頭を大きく振られ、そのまま錐揉みながら落下していく。

『おっと…！』

前述の通り、落下の衝撃で鞭打ちになられても夢見が悪いのか、パワーアーマーの

ローラーを駆動させてキャッチ。間一髪、地面との熱い抱擁は躱された。
【セシリア・オルコット　戦闘不能
勝者　ロン・ラーワンダー】
思えば、シールドエネルギーが半分以上残した状態での勝利。だが、それを賞賛する者は誰もおらず…
『ラーワンダー。』
冷たく、そして低い声が管制室から飛んできた。
言わずもがな、千冬である。
『まずは勝利おめでとう、か？…だが、それと同時に言っておこう。』
ハァ…、と大きな溜息と共に、声だけの千冬が、管制室で頭を抱えているのがなぜかわかった。
『アリーナ、片付けておけよ。』
撃ち出されたゴミが散乱したアリーナの惨状が、千冬の溜息の理由を物語っていた。

第８話『次の戦いに向けて』

「なるほど、いい戦い振りだったね。」

アリーナのクラス代表決定戦の１幕。双眼鏡でそれを遠巻きに見ていた男が言葉を漏らした。ウサギのアップリケがあしらわれた白と黒とのボーダーを身に纏い、深く白い帽子を被った彼は紛うことなくロンにＰＩＰ－ＢＯＹ…いや、ＩＳを届けた宅配者だ。

『そりゃこの私があの高慢ちきな英国金髪のＩＳに合わせてセッティングしたからね。負ける方がおかしいよ。』

耳に付けられたインカム越しに、自信に満ちた女性の声が響く。

レーザー主体のセシリアのブルーティアーズに対して、耐熱加工であるプリズムコーティングを施しておいた。それによる恩恵で、レーザーによるダメージを極端に軽減して、優位に立てていたのだ。だが、それを差し引いたにしても、綺麗な被ダメージは初撃のヘッドショットのみ。あとは掠ることはあれどもクリーンヒットはない。これも元のパワーアーマーに付与されていたカスタムである『オーバードライブ・サーボ』を更に改良したものだ。元々これは走行時、蹴り出す際に脚部の足底から圧縮したエネル

ギーを解放することで、ダッシュの速度を底上げするものだった。それによって生身とは比べものにならない程に走行速度を上昇させることが出来たのだが、それによる弊害でパワーアーマーの動力がオーバーヒートしやすくなってしまうのが難点だった。そこで、脚部を更なるカスタマイズを施した結果、ローラーダッシュによる走破能力に加え、上昇した熱を脚部の膨ら脛に当たる部位から、噴射して排熱することにより、速度を更に上昇させることに成功したのだ。結果として、オーバーヒートするまでの時間をかなり延ばすことに成功はしたが、ある程度脚部の肥大化は避けられない結果となったのだが。

「全く、僕がせこせこカスタマイズをしていた物を、軽々と上回る魔改造をしてしまうものだから恐れ入るよ。」

『ふふん。束さんの頭脳に恐れ入ったかい？ネイ君。』

ネイ君と呼ばれた彼…ネイトは、双眼鏡から目を離し、インカム越しにエヘンと胸を張る天災（束）に苦笑する。

『まぁ、ネイ君のパワーアーマーの方にもフィードバックしているから、ある意味一石二鳥なんだよね。何というか、拡張性がありすぎて改造しがいがあるんだよ。昔のパワーアーマーと言っても侮れないね！』

「その辺りは有り難いものだよ。おかげで各地のレジスタンスへの支援の介入も楽に

なってきた。ありがとう束。」
『おっ？おっ？いいねいいね！もっと束さんを褒めても良いんだよ？』
「ちょっと、いいですか？」
背後からいきなりの第三者の声。その問い掛けに、束は口を閉じ、ネイトは振り返る。
そこには…セシリアのブルー・ティアーズより薄い青、そして同じく薄い装甲のＩＳを纏った水色の跳ね髪の少女が、手に持っているガトリングガンを内蔵した槍を突き付けていた。
「ここはＩＳ学園の敷地内です。第三者がこのような場所に何の用ですか？見た所、運送会社の方のようですが？」
「いや、僕は白ウサギ運送の者でね。ここの男子生徒に届け物をしてその帰りなんだよ。」
「へぇ……それはお勤めご苦労様です。」
ニコリと、極上とも思える笑みを浮かべた少女は、これに納得して槍を下げる……かと思いきや、ガトリングガンをいつでも撃てるように、トリガーへと指を添える。
「でもおかしいですね？白ウサギ運送なんていう運送会社、ウチの情報網には存在し得ません。そもそも第三者を、今最も命が狙われやすい男子生徒に近寄らせるでしょうか

？」

「……。」

不敵な笑みを浮かべる少女に、ネイトの目が鋭くなる。

もしかしたら…この子は…『裏の世界』の人間かも知れない。そんな予感が過ぎる。

「そして、ＩＳ学園に正式に入るためには、正面ゲートで身分証明書を提出して、それをデータと照らし合わさなければなりません。ですが今日に至っては、郵便物はともかく、宅配便の業者が来た、と言う履歴は残されていないんです。つまり……

貴方の来訪、そしてこの場にいる過程その物が、正規の物ではない可能性が示唆できますね。…詳しいお話しを聞かせて貰っても？」

「断る…と言ったら？」

顔をバレないように帽子を目深に被り、しかし少女の動きを見逃さないように睨みを利かせる。そしてそれは相手の方も同じく、不穏な動きを見逃さぬようぬな目を光らせていた。

「不本意では有りますが、実力行使…と言うことになります。」

「そうか。なら仕方ない。」

言うや否や、ネイトの身体が一瞬ぶれて電流が走ったかと思えば、見る見るうちに透

き通っていき、その向こうにある景色を写し出していく。
「これは…ステルス!?…でもハイパーセンサーで…!!」
『無駄だよ。』
　彼の姿を追おうとする少女に、無意味なことはするなと言わんばかりに、目の前のディスプレイには紫色の長い髪をし、ウサ耳のカチューシャをした女性が現れる。それは…少女もよく知る、おそらくは世界で一番捜索されている人物。
「なっ……あ、あなたは…篠ノ乃博士!?」
『そっ、束さんだよ〜?悪いんだけどさ、彼は束さんの協力者なんだ。だから捕まえたりするのは止めてくんないかな?ま、捕まえようにも、束さんお手製のハイパーセンサーに引っ掛からないステルスＢＯＹ君のお陰で無理だろうけど。』
「し、しかし!ＩＳ学園に侵入となんの関係が…」
『うるさいなぁ。』
　ぞくり、と少女の背をなぞるかのような、底冷えした冷たい声が、モニター越しに聞こえた。目の前に映る篠ノ乃束、その声に変わりない。しかしその声色は、先程までの人を食ったかのような物ではなく、眼だけで軽く人の気を失わせることが出来るかのような、そんな極寒の物だった。
『束さんが彼を捕まえないでって言ってんだから、キミはそれをＯＫすれば良いの。…

別に実害はなかったんだ。寧ろ、いっ君ともう一人の男の子…ロン君？だっけ？その子にプラスはあってもマイナスはないんだよ？別にそれならいいじゃん。』

だがとある元世界最強の女性教師からすればこう言うだろう。

『アイツに気に入られたのなら、お前も災難だな。』

と、寧ろマイナスに捉えられるだろうが。

『ま、そんなわけだからさ。別に彼を見逃したからといって、悪いことはないよ。…寧ろ、これからの世界に必要なことなんだから。』

「必要な…こと？」

『そうだよ～』

含みのある言い方に、反復して尋ねてしまうが、其程までに引っ掛かる物言いなのは変わりない。

そして、その興味を惹くことを成した束は、先程の冷気の籠もった眼と声から一転。元の彼女に戻る。

『まぁキミの実家…【対暗部用暗部】…だっけ？ソレについてもプラスになる。…こんな世界を、壊すために、ね。』

「世界を、壊す…？」

『ま、そう言うことで、更識家にもちょっとした情報が近々入るからさ。楽しみにしてな

よ。…たっちゃん。いや、かたちゃんと言った方が良いかな?』

最後にバイビー!と真面目な通信だったの疑いそうになるような別れの挨拶を皮切りに、プツリと通信が切れた。

…なんだろう。

さっきの宅配便の人と対峙したときよりも、束と話した時の方がどっと疲れた気がする…。

「…でも、さっきのステルス少年?だかなんだかを使って、学園のセキュリティを突破したのは間違いないわね。…ホントに…奇天烈な発明をされる人だわ。」

はぁ…と溜息一つに、後ろを振り返るも誰も居ない。しかし、まだそう遠くはない所を移動中の宅配便の彼…彼を追わないにしても、その素性については知っておく必要があると思った。

顔が見えなくても、ある程度の情報はある。

声紋や体格…そして左手にあった妙な籠手のような物。

「虚ちゃん。」

『なんでしょう?お嬢様。』

束と変わって、次に映し出されたのは、よく知る少女。眼鏡を掛け、正に真面目という代名詞が相応しいまでの一つ年上で幼馴染み兼自身の従者兼友人。

「今から送る画像データと音声データ、それらを照らし合わせて適合者を割り出してくれないかしら？」
『…と、言いますと？』
「篠ノ乃博士の関係者よ。」
『…っ！わかりました。私を含め、更識家の諜報部にも依頼をしておきます。』
「お願いね。」
プツリと再び切れた通信。ここにきて、ようやくＩＳを解除し…空を見やる。
突き抜けんばかりの晴天に、ぽつりぽつりと浮かぶ雲。
何のことはない。晴れた大空。
しかし少女…更識楯無の目には…天災の前触れ…そんな風にも見えた。

結局、放出しまくったジャンクをＰＩＰ－ＢＯＹの量子格納に放り運んでから（実際ゴミを袋に入れようとすれば、かなりの量になりかねないので）後日ゴミ集積所に持っ

ていこうと心に決めたのは、既に夕食の時間になっていた。
疲労困憊に加え、身体に染みついたゴミ臭い匂いを落とすべく、アリーナに備え付けられた簡易シャワーを浴びることにした。着用していたＩＳスーツはＰＩＰ－ＢＯＹにこれまた量子格納し、シャワーを浴びたら制服に着替える。ただそれだけの行程。備え付けの備品であるボディーソープで身体を隅々まで洗い、石鹸の匂いで誤魔化して…。それによってサッパリはしたが、念入りに洗ったので余計に疲れが襲ってきた。
「う……これはさすがに…夕食を食べる元気はない、かな…。」
さすがに身体に染みついたモノは消えたにしても、ゴミの匂いを嗅いでいたこと自体は事実で、鼻腔の奥に染みついている。それを脳が鮮明に記憶しているため、今の地点で夕食を摂ろうとする気にはなれず、また食欲が戻るまで待っていては、夕食時間が終わってしまうので、自販機でカロリーメ○トを買っておこうと考えつつ制服に袖を通して、未だ乾ききらぬ短い金髪をタオルで拭きながら廊下に出た時、
「よっ！お疲れロン。」
向かいの壁に背を預けて待っていた一夏が、何の気なく手を上げて挨拶してきた。
「もしかして、待っていたのかい？」
「まぁな。夕食、まだだろ？食いに行こうぜ。」
「済まない一夏。疲労困憊とゴミを扱ったので…正直食欲が湧かないんだ。」

本当に申し訳ない思いからか、自然と声のトーンも下がってしまう。
折角待っていたのに、と思ってしまうかも知れない。だが、一夏は顔をゆがめることもなく、ロンの肩を叩いた。
「まぁ後片付けしてたんだ。仕方ねぇよ。…じゃあ俺は食堂に行くけど、ロンはどうするんだ？」
「自販機か何かで携帯食を買って、食べれるときに食べれるようにするよ。」
「そうか…、じゃあ明日の朝は一緒に食おうぜ。正直、食堂で男一人は辛いからな。」
「あぁ。約束するよ。」
とりあえずアリーナから食堂、もしくは寮に向かうまでは共通のルートのため、途中まで連れ立っていくことにした。
結局、アリーナの片付けで時間を追われ、セシリアとロン、二人の一戦のみで今日の試合は終わることとなってしまい、翌日の放課後に残りを持ち越すこととなった。
残る試合は２試合。ロンと一夏、そして一夏とセシリアとの組み合わせである。
「でもまぁ…国家代表候補生に勝っちまうなんてな。本当に搭乗時間少なかったのかと疑ってしまうぞ？」
「事実だよ。男性操縦者を探して政府の奴等がやってきて…その時にチェックと、一通りの動きとか、そういったテスト以外は動かしてない。…正味、１時間か２時間しか

触ってないかな。」
「…てことは、入学前の試験官との試合もしてないのか？」
「何分、急だったからな。そんなのもあったのか？」
「まぁな。…だとしたら余計にスゲぇな。」
一夏も、箒や千冬、真耶と共にハンガー近くのモニターで試合を観戦していていたが、2人の…いや、年端も変わらぬ人間がこうして戦うことが出来ていたことに目を奪われていた。過去に千冬が、モンド・グロッソにおいて、決勝進出まで駒を進めたとき、現地でその戦いを観てはいた。しかし、姉の人外振りは既知だったので、頑張れという応援以外の思いは浮かばずにいた。
だが初心者にも関わらず、国家代表候補生であるセシリアと戦い、そして勝利を収めた彼の戦いは、一夏にとっては同じ男として素直に賞賛できる物であり、加えて友人として誇らしくも思えた。
「明日は…ロンかセシリア、どっちが先になるかわかんねぇけど、どっちにしても試合では本気でやろうぜ。」
「当たり前だろう？…お互い、手加減無しだ。」
そして…目の前の男と戦って、勝ちたい。
護られてばかりの自分が嫌だった。いつも強い姉の影に護られて、育って、そして『2

年前に自分が姉の栄光に泥を塗った』事が許せずにいた。でも今はＩＳと言う守れる力を手に入れた。これがあれば、今まで自分を護り、育ててくれた千冬を護れる。その力のためにも、一夏は今目の前の強者と戦って…自分の強さを知りたかった。

「悪いけど…勝ちに行かせて貰うからな！」

「その言葉、そっくり返すさ。」

力強く、コツンと合わせた拳は宣戦布告。

絶対に勝って…自分の力を試す。それだけを思って。